

## 第4章 京都大学本部構内 AW26 区の発掘調査

千葉 豊

### 1 調査の概要

本調査区は、京都大学本部構内のほぼ中央に位置し、吉田山西麓の北白川扇状地の扇央にあたる（図版1-271）。ここに総合研究棟の新営が計画されたため、これまでの調査成果を勘案して、新営予定地全域の発掘調査をおこなった。調査期間は1999年10月4日～12月9日、調査面積は1913.3㎡。また調査終了後、調査区東側に実験排水路付け替え工事がおこなわれたため、立合調査をおこなった。その成果についてもあわせて報告する。

本部構内ではこれまでの調査で、弥生時代前期の流路（219地点）、奈良時代の竪穴住居（75地点）、中世の建物（214地点）・土坑墓（75地点）・土器溜（90・110地点）・砂取穴（214地点）・白川道（168地点）、近世の白川道（57・90・181地点）などがみつかっており、絵図などから幕末期に尾張藩邸がこの地に設置されたことが知られている。また1993年度・95年度におこなわれた本調査区の北に隣接する218・230・241地点の調査では、中世の溝群・井戸・集石土坑・集石などを検出するとともに、縄文土器や古代・近世の遺物を多数得ている（図48）。このような過去の成果から、今回の調査でも縄文時代から幕末期にいたる遺跡の存在を予想しつつ、発掘調査をおこなった。

発掘調査の結果、文学部旧建物の基礎や埋設管などによって遺跡は大きく破壊されていたものの、近世の溝、中世の井戸・瓦溜・溝、古墳時代終末期の溝などを検出することができた。遺物は、縄文時代から幕末期に及び、整理箱40箱を数える。

なお発掘調査と資料整理は千葉豊と阪口英毅が担当し、発掘と整理を通じて、本吉理恵子、曾根茂、長尾玲、佐々木奈月、下坂澄子が補助した。

### 2 層 位

遺跡は、文学部旧本館の南棟とその周囲に敷設された管路によって大きく破壊されており、土層の堆積状況を連続して観察できる良好な地点がなかった。よって、調査区の5箇所で記録した層位模式図と（図47上半）、調査区東側の立合調査の西壁で得られた堆積状況を掲げて（図47下半）、層位の説明をおこないたい。

現地表面の標高は、調査区北東隅で59.0m、南西隅で57.8mをはかり、北東から南西へ

なだらかに傾斜している。遺物包含層の基本的な堆積は、上から順に表土（第1層）、灰褐色土（第2層）、茶褐色土（第3層）、暗褐色土（第4層）である。

第1層は近代～現代の整地上。第2層の灰褐色土は近世（18～19世紀）、第3層の茶褐色土は古代末から中世（12～14世紀）の遺物包含層である。いずれも近代以降の削平を免れた調査区北西辺と南西辺にわずかに残存しているのみであった。茶褐色土上面および暗褐色土（第4層）上面のレベルを各地点間で比較すると、立合調査区の北端がもっとも高く、本調査区南西隅がもっとも低くなっており、北東に高く南西に低いという現在の地形が少なくとも中世以前まで遡って形成されたものであることがわかる。

第4層の暗褐色土は調査区内では層厚20～30cmをはかり、縄文時代から7世紀までの遺物を包含していた。この堆積物は、東に隣接する立合調査区では、黄色砂（第5層）をはさんで上下に分離でき（4a層と4b・c層）、下層はさらに比較的均質な4b層と小礫・粗砂のまじる4c層に区分できた。また暗褐色土を埋土とする古代の溝SD2は、本調査区では第6層の黄褐色シルト1、立合調査区では第5層の黄色砂を掘り込んで構築されていた。

黄色砂は南北に延びる立合調査区では、層厚30～50cmで安定してみられ、小礫～粗砂からなる上部と細砂からなる下部に細分できたのに対して、本調査区内にはまったくみとめることはできなかった。立合調査区と本調査区東壁の約3mのあいだで漸減しながら消失し、それにともない4a層と4b層も境を接することになったと推定できる。立合調査区内の4a層は4b・c層と比較して、やや黒みが強いという特徴を観察できたが、本調査区内の第4層をさらに細分することは困難であった。

黄色砂はその特徴から、京都大学吉田キャンパス一帯に広く堆積した、弥生前期末・中期初頭ごろの洪水層である。この黄色砂は、北に隣接する調査区では、218地点の北西端でみとめられた扇状地末端の斜面に厚い堆積を確認したほかは、230・241地点では調査区東辺などのごく一部で薄層をみとめただけであった。こうした堆積状況を勘案すれば、黄色砂が堆積した弥生前期末ごろの本調査区付近は北側の調査区とともに、北東から南西に延びる微高地上に位置してほとんど洪水の影響を受けず、立合調査区でみられた黄色砂は、この微高地の南東側に形成された谷部、218地点でみとめられた黄色砂は北西側に形成された谷部を流れて埋積したものと理解することができるだろう。

6層以下は、シルト・砂・砂礫といった水流による堆積物の互層であり、人工遺物はまったく確認できなかった。

層 位

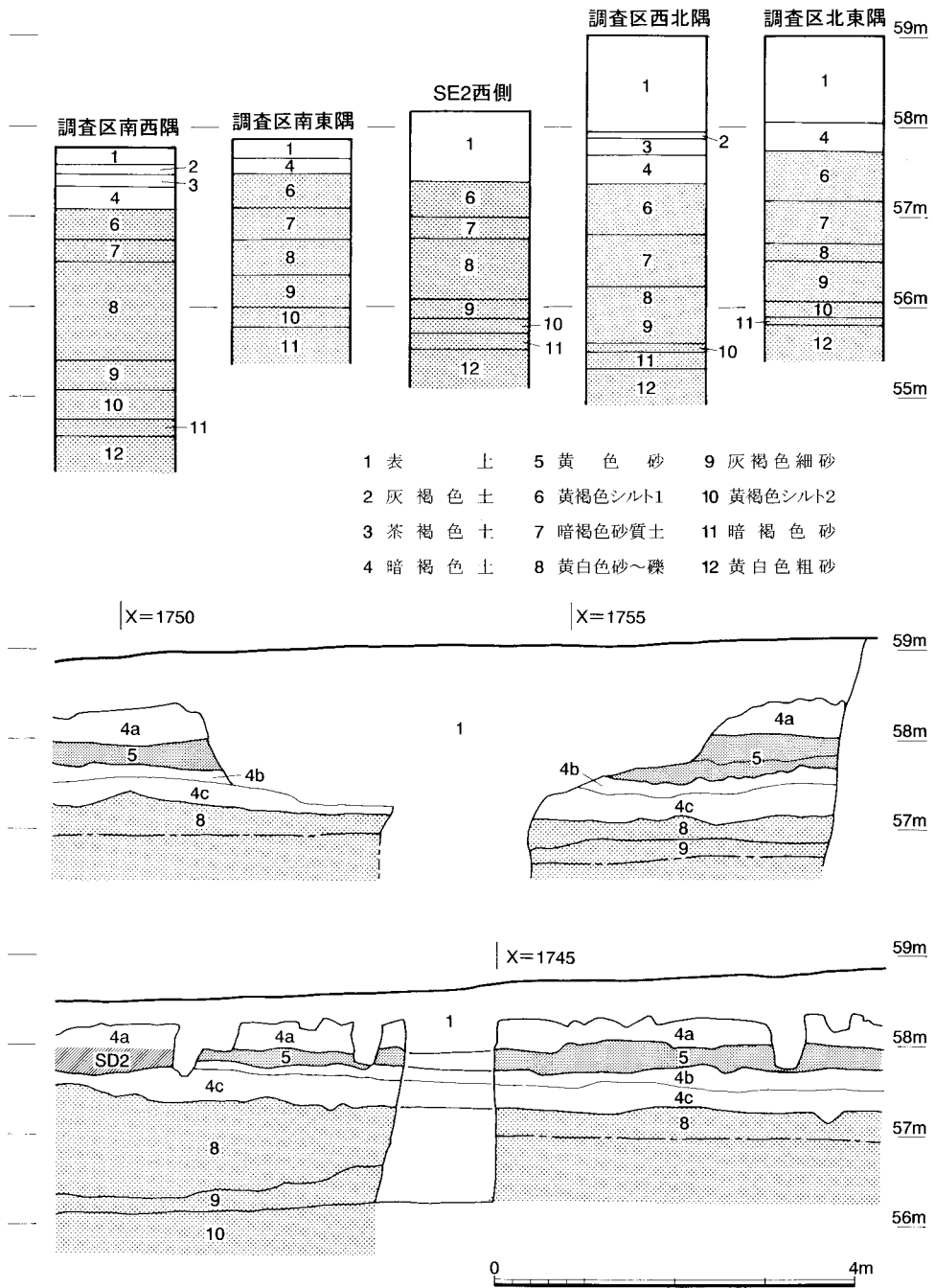


図47 本調査区の層位模式図と立合調査区の層位 縮尺1/80

### 3 遺 構

#### (1) 古墳時代の遺構（図版20，図48）

この時代の遺構としては，調査区東辺と立合調査区で検出した溝 SD2 がある。やや北に振れながら東西方向にはしり，中世の溝 SD3 に切られている。断面逆台形で，幅 1.8m，深さ 30～40cm をはかる。埋土から，7 世紀前半代の須恵器が出土している。

#### (2) 中世の遺構（図版19・20，図48）

中世の遺構は，井戸，溝，瓦溜，土坑などからなる。

**井 戸** SE1 は上部を旧建物の基礎によって大きく破壊されており，中部から下部を検出した。掘方は 2 段に掘られており，上段は北西隅が突出し，南東隅がくぼむという不整形を呈している。下段の掘り方は，深さが 4.2m 前後あり，上段は検出面からの深さは 1m 前後であるが，当時の地表面からは 3m 前後の深さがあつたと復元できる。井戸の深さの中位付近にテラスを設けて，井戸構築の足場などに利用したのであろう。井戸側は円形石組からなり，底から材が出土しているため，水溜部は木枠を用いたものであつた可能性が高い。水溜からは，曲物（Ⅲ318～Ⅲ322）も出土しているが，底板があることから，水溜へ利用されたものではなく，廃絶にともなつて廃棄されたものと考ええる。検出面からの深さは約 5m で，井戸底の標高は 50.72m である。

SE2 は，隅丸長方形の掘り方で円形石組構造。埋土に井戸側を構成する礫が多数落ち込んでいた。水溜部は幅 0.8m 前後の上部とそれより一回り小さな下部の 2 段で構築されていたが，礫の崩落が著しく，構造を詳細に観察することはできなかった。水溜上部の肩付近から，灰釉系陶器（Ⅲ29）が出土した。検出面からの深さ 6.2m をはかり，井戸底の標高は，51.24m である。

SE3 は，径 3.5m 前後の不整円形掘方をもつ。井戸側を構成する礫や材がみられないことから，素掘り井戸と考えておく。検出面からの深さ 5.7m，底の標高 51.14m である。

SE4 は不整円形の掘り方をもつ円形石組の井戸。井戸側内上半を中心に，整理箱 9 箱の遺物が出土した。水溜部は 1 辺 1m 前後の方形掘り方で，木質は遺存していなかったが，鉄釘が出土しているので，木枠を設置していた可能性が高い。検出面からの深さ 6.1m をはかり，井戸底の標高は 51.38m である。

これらの井戸は，井戸側埋土から出土した遺物から判断して，SE1 と SE2 が 13 世紀初頭，SE3 が 13 世紀前半葉，SE4 が 14 世紀前半葉には廃絶している。

# 遺 構

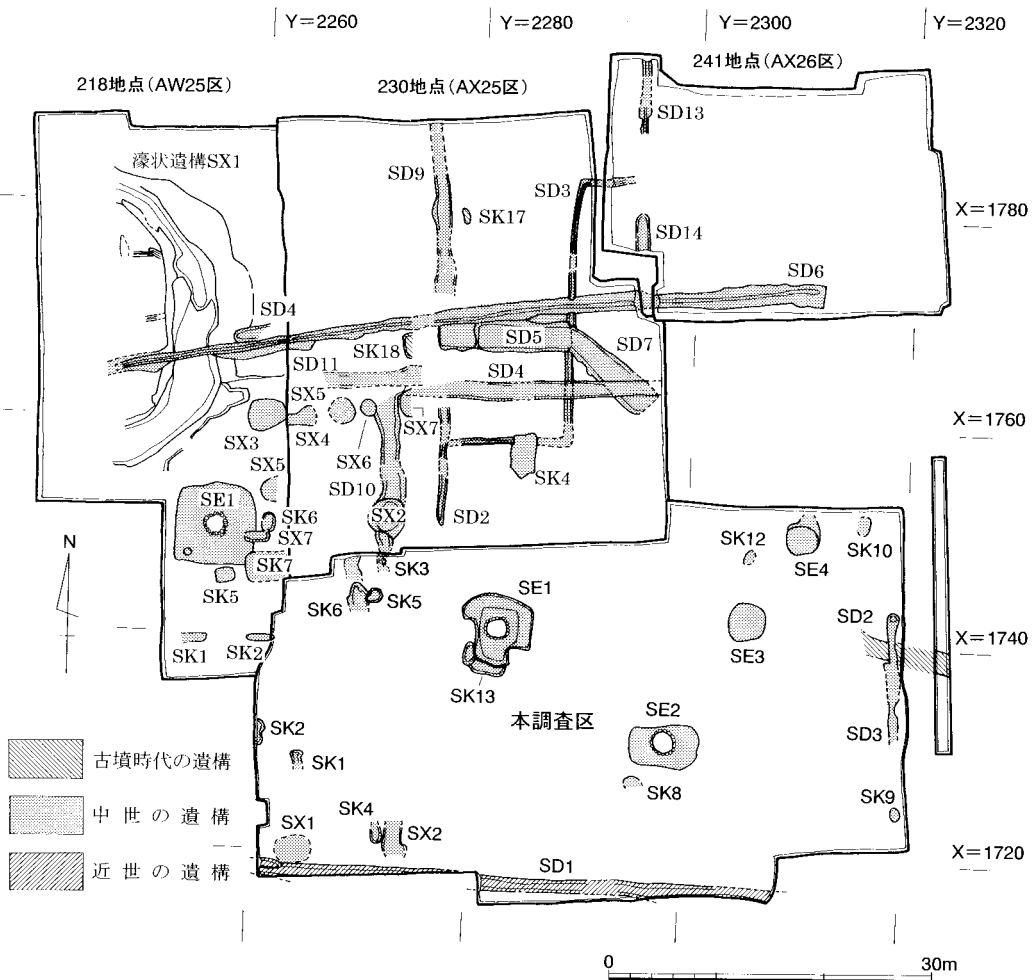


図48 検出遺構と周辺調査区のおもな遺構 縮尺1/700

**溝** 調査区東端で検出したSD3は南北方向にはしり、現存長11mをはかる。北端はX=1744付近で土坑状に一段掘りくぼめられて終わっており、南側の続きは攪乱により不明。ただし、延長上にSK9が位置しており、それ以北に南端がくるものと考えられる。このほか、北西辺で検出したSK3は1995年度調査区のSD10の南端と理解する。また南西辺でみつかったSX2は南北に細長い形状をしており、溝となる可能性が高い。これらは、13世紀前半には埋没したものと思われる。

**土 坑** 性格を異にするとと思われる土坑がいくつか見つかった。

廃棄土坑と理解できるものに、SK1・SK12がある。調査区西辺でみつかったSK1は

瓦類をまとめて廃棄した土坑。短辺1.0m前後、南端が破壊されていたため長辺の長さは不明であるが、現状で1.3mをはかる隅丸長方形を呈する。ここから、整理箱8箱におよぶ瓦類と少量の土師器、白磁が出土した。12世紀後葉。SE4の西側で検出したSK12は人頭大の礫を多数埋土に含む集石土坑である。不要になった礫を捨てた土坑と理解しておく。出土土師器から、14世紀中葉ごろである。

砂やシルトの採取を目的に掘られたと理解しう土坑がSK8・SK13・SX1である。SE2の南側で検出されたSK8は南側を攪乱で破壊されている。黄白砂の部分で大きく横に掘り込まれている。SE1に切られているSK13は、当初SE1の掘り方の一部とも考えたが、その底面がSE1の掘り方底部より2m高いこと、黄白色の粗砂層を掘り込んでとまっていることから、砂取りを目的に掘り込まれた土坑と理解しておきたい。攪乱で輪郭がはっきりしないが、調査区南西端のSX1も、黄褐色のシルトを掘り込んでいること、茶褐色土にシルトが混在する埋土の状況から、同様の性格と理解する。これらは、12世紀後葉～13世紀前葉におさまる。

墓ないしは祭祀に関連する可能性のある土坑としてSK4・SK6・SK9がある。調査区南西辺で検出したSK4は幅1m前後、北側を攪乱で破壊されており長さは現存1.5mをはかる。断面U字型を呈し、南よりの底面から完形の土師器皿が1点出土している。調査区北西辺で検出したSK6はSK5にきられる。幅1.5m前後で、南北に細長くなるとおもわれるが、南側は攪乱で破壊されている。土坑内北寄り、完形の土師器小皿が5点、底面よりわずかに浮いた状態で出土した。調査区南東端で検出したSK9は、長径1.2m、短径1mをはかる楕円形を呈する。完形の土師器小皿5点、大皿2点が出土した。

出土遺物から、SK4は12世紀後葉、SK6とSK9は13世紀前葉ごろであろう。

このほか、調査区西端でSK2、北西辺でSK5、北東辺でSK10を検出しているが、遺構の性格を決める材料に乏しい。

### (3) 近世の遺構（図版19、図48）

茶褐色土上面で、耕作関連と思われる無数の小穴をみつけたほか、調査区南辺で、東西方向に延びる溝SD1を検出した。検出長47mで、両端ともに調査区外へと続く。断面逆台形で、検出面からの深さ60～90cmをはかる。底部に、わずかに粘質土が堆積しているものの、常時水が流れたような痕跡はなかった。埋土の状況から、廃絶後に一気に埋め立てられたと考えられる。幕末を中心とする遺物が出土しており、この時期に当地に設置された尾張藩邸に関連する遺構であろう。

## 4 出土遺物

## (1) 縄文時代の遺物 (図版21, 図49)

暗褐色土および上層の茶褐色土, 中世の遺構から縄文土器26点, 石器2点が出土した。図示可能な土器4点と石器2点を報告する。なおⅢ3が, 本来の包含層と理解できる暗褐色土から出土しているほかは, すべて歴史時代の遺構に混在していた。

Ⅲ1は2段右撚の縄文地に, 半截竹管による沈線文が垂下する。中期中葉, 船元Ⅲ式。Ⅲ2は2本の沈線間に2段左撚の縄文を充填する。Ⅲ3は条線文をめぐらして, 沈線で縁取りする。Ⅲ4は口縁部前面がわずかに肥厚し, 口縁部には横位, 頸部には縦位に細密条痕を施している。胎土に角閃石をふくみ, 暗褐色を呈する。Ⅲ2～Ⅲ4は, 後期前葉, 北白川上層式に比定できる。

Ⅲ5は凹基有茎尖頭器。チャート製で, <sup>なかこ</sup>茎の先端を欠失し, 現存長3.4cm, 最大幅2.6cm, 重量4.6gをはかる。復元しても4cmに満たず, 有茎尖頭器としてはもっとも小型の部類である。有茎尖頭器は, 本調査区から南東約250mの地点にあたるAU30区の発掘調査で, チャート製のものがみつかり [千葉ほか1997], 本学構内遺跡としては2例目となる。近畿地方の事例としては, 縄文早期・押型文期にともなう事例があり, 本学

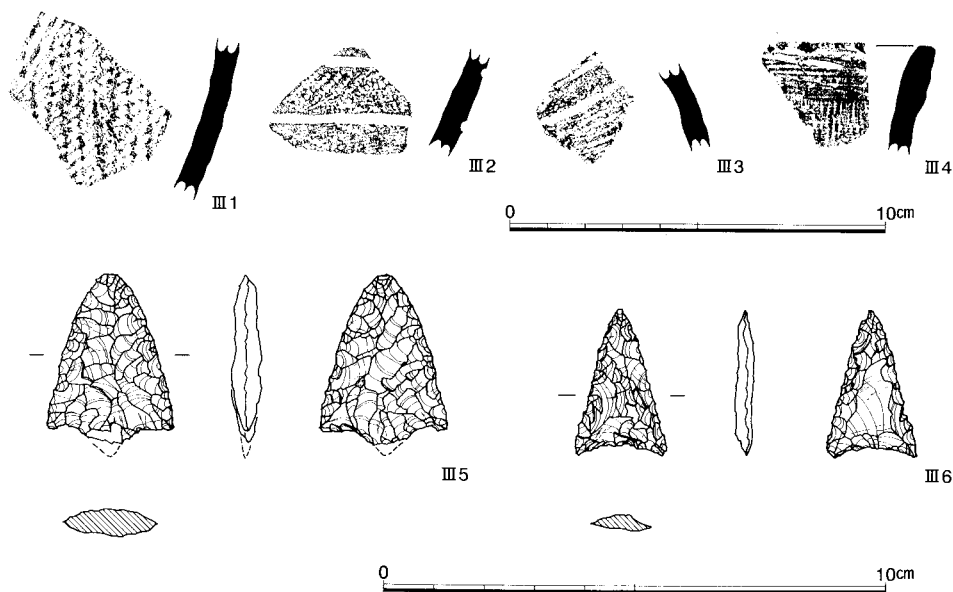


図49 縄文時代の遺物 (Ⅲ1～Ⅲ4縄文土器, Ⅲ5有茎尖頭器, Ⅲ6石鏃)

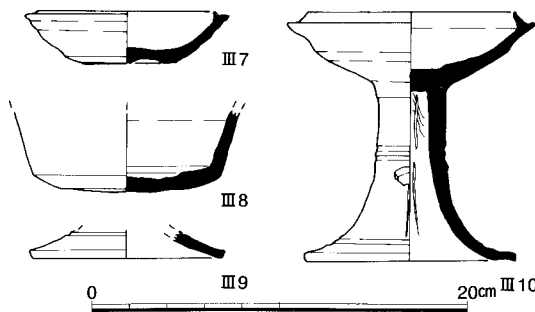


図50 古墳時代の遺物  
(Ⅲ 7～Ⅲ10須恵器)

構内遺跡も含めて比叡山西南麓には押型文期の遺跡が点在するので、この時期に所属する可能性が高いと理解する。サヌカイト製が多い近畿地方の状況の中で、2例ともにチャート製であることは、チャート製の比率が高い滋賀・三重県やそれ以东との関連を想定すべきであろう〔西口1991〕。Ⅲ 6はサヌカイト製の凹基石鏝。長さ3.0cm，最大幅1.8cm，重量1.5gをはかる。背面に，原石面を一部残す。

(2) 古墳時代の遺物 (図版21, 図50)

Ⅲ 7～Ⅲ10はSD2出土の須恵器。Ⅲ 7は蓋杯の身。立ち上がりの径9.4cm，受部の径10.8cmをはかる。立ち上がりは，断面三角形で低くずんぐりと立ち上がる。受部の端部に輪状に付着する自然釉から，蓋とセットで重ね焼きしたことがわかる。Ⅲ 8は杯ないしは碗。底面は，篋切り時の粘土のはみ出しが残り，平坦ではない。底面と体部の境に，篋削りを施す。見込みの部分のみに，自然釉が付着している。Ⅲ 9・Ⅲ10は高杯。Ⅲ 9は高杯脚端部の小片であるが，Ⅲ10とは別個体である。Ⅲ10は，立ち上がりの径10.8cm，受部の径13.2cmをはかる。立ち上がりは，断面三角形で体部との境が比較的明瞭である。長脚の脚部は中央に2条の沈線を巡らし，2段2方に透孔をもつ。透孔は，篋状の工具で切れ目を入れただけで，ほとんど痕跡と化しており，上段の透孔は，乾燥・焼成の過程でほとんどふさがってしまっている。脚部中央付近には，別個体の小破片が熔着している。杯部外面および脚部の内面に自然釉が付着していることから，倒立させて焼成したと理解する。これらは岩倉Ⅰ段階に比定でき，7世紀前半のものであろう〔宮本1992〕。

(3) 中世の遺物 (図版22～24, 図51～58)

発掘調査で得た資料の大半は，中世の遺物であり，整理箱37箱を数える。遺構から出土した土器・陶磁器類の実測図を掲げて解説を加える。なお，瓦類と木製品については別項をたてて記述した。

**SE2 出土遺物 (Ⅲ11～Ⅲ33)** Ⅲ11～Ⅲ26は橙褐色の土師器皿。Ⅲ11～Ⅲ18は口径14

## 出土遺物

～15cmのAⅠ，Ⅲ19～Ⅲ24は口径9～9.5cmのAⅡである。口縁形態は，Ⅲ11～Ⅲ14・Ⅲ19～Ⅲ22が2段撫で手法C<sub>3</sub>類，Ⅲ15～Ⅲ18・Ⅲ25・Ⅲ26は1段撫で面取り手法D<sub>4</sub>類，Ⅲ23が2段撫で面取り手法C<sub>3</sub>類，Ⅲ24が1段撫で素縁手法D<sub>3</sub>類である。Ⅲ27は土師器耳皿。Ⅲ28は須恵器杯Bの蓋。偏平な宝珠つまみがつく。平安前期に遡る遺物の混入であろう。Ⅲ29は水溜出土の灰釉系陶器碗。口縁部が外反し，底部は回転糸切りで，外に開く高台を貼り付ける。見込みが摩滅しており，すり鉢のような使用形態が想定できる。Ⅲ30・Ⅲ31は白磁碗で，口縁部は肉厚な玉縁をなす。Ⅲ30は見込みに沈線がめぐる。碗Ⅳ類〔山本2000〕。以下，貿易陶磁器の分類は，本文献に拠った。Ⅲ32・Ⅲ33は和泉型瓦器碗。見込みに格子状暗文を施文した後，体部内面を螺旋状暗文で仕上げる。体部外面の暗文は疎らで，Ⅲ32は体部中央に指押さへの跡が顕著に残る。高台は三角形に突出する。尾上実の編年によるⅡ－3期に比定できる〔尾上1983〕。

**SK1 出土遺物**（Ⅲ34～Ⅲ36） いずれも橙褐色の土師器皿で，Ⅲ34・Ⅲ35はD<sub>4</sub>類，Ⅲ36はC<sub>3</sub>類。

**SE1 出土遺物**（Ⅲ37～Ⅲ57） Ⅲ37～Ⅲ41は裏込め出土。Ⅲ37・Ⅲ38はともに，D<sub>4</sub>類の橙褐色の土師器皿。Ⅲ39は和泉型瓦器碗で，見込みに格子状の暗文をほどこす。体部外面には，指押さへの跡が顕著に残る。Ⅱ－3期。Ⅲ40は白磁，Ⅲ41は青磁の碗。

Ⅲ42～Ⅲ57は井戸側内出土。Ⅲ42～Ⅲ51は橙褐色の土師器皿で，Ⅲ42からⅢ45は口径13～15cmのAⅠ，Ⅲ46～Ⅲ51は8～9cmのAⅡ。Ⅲ52は灰白色の土師器碗。口縁形態は，Ⅲ42・Ⅲ43・Ⅲ52がC<sub>3</sub>類で，残りはD<sub>4</sub>類である。Ⅲ53は，内面に片切り彫りによる劃花文をもつ青磁碗。Ⅲ54は瓦器鍋。2段に屈曲する受部をもち，体部はややふくらむ。外面には煤が厚く付着。Ⅲ55は瓦器羽釜。口縁端部が面取りにより内傾する。外側端部が摩滅しているのは使用によるものであろうか。鋸下面から体部にかけて，煤が薄く付着している。Ⅲ56は滑石製石鍋。補修孔があり，その孔から紐通しのための溝が内外面ともほどこされている。Ⅲ57は滑石製品で，幅は8.4～8.6cm，厚さは2.2～2.4cm。現存長は10.2cmをはかるが，欠損しており実際の長さは不明。長辺の一端を穿孔する。重量396.4g。石鍋を温石のようなものとして再利用したものと理解しておく。

**SK4 出土遺物**（Ⅲ58～Ⅲ67） いずれも橙褐色の土師器皿。Ⅲ58～Ⅲ63が口径14～16cm台のAⅠ，Ⅲ64～Ⅲ67が9～10cmのAⅡ。口縁形態はⅢ58がC<sub>3</sub>類，Ⅲ59がC<sub>4</sub>類，Ⅲ60～Ⅲ63・Ⅲ66・Ⅲ67がD<sub>4</sub>類，Ⅲ64・Ⅲ65がD<sub>3</sub>類である。

**SD3 出土遺物**（Ⅲ68～Ⅲ85） Ⅲ68～Ⅲ81は土師器皿で，Ⅲ70・Ⅲ75が灰白色を呈する

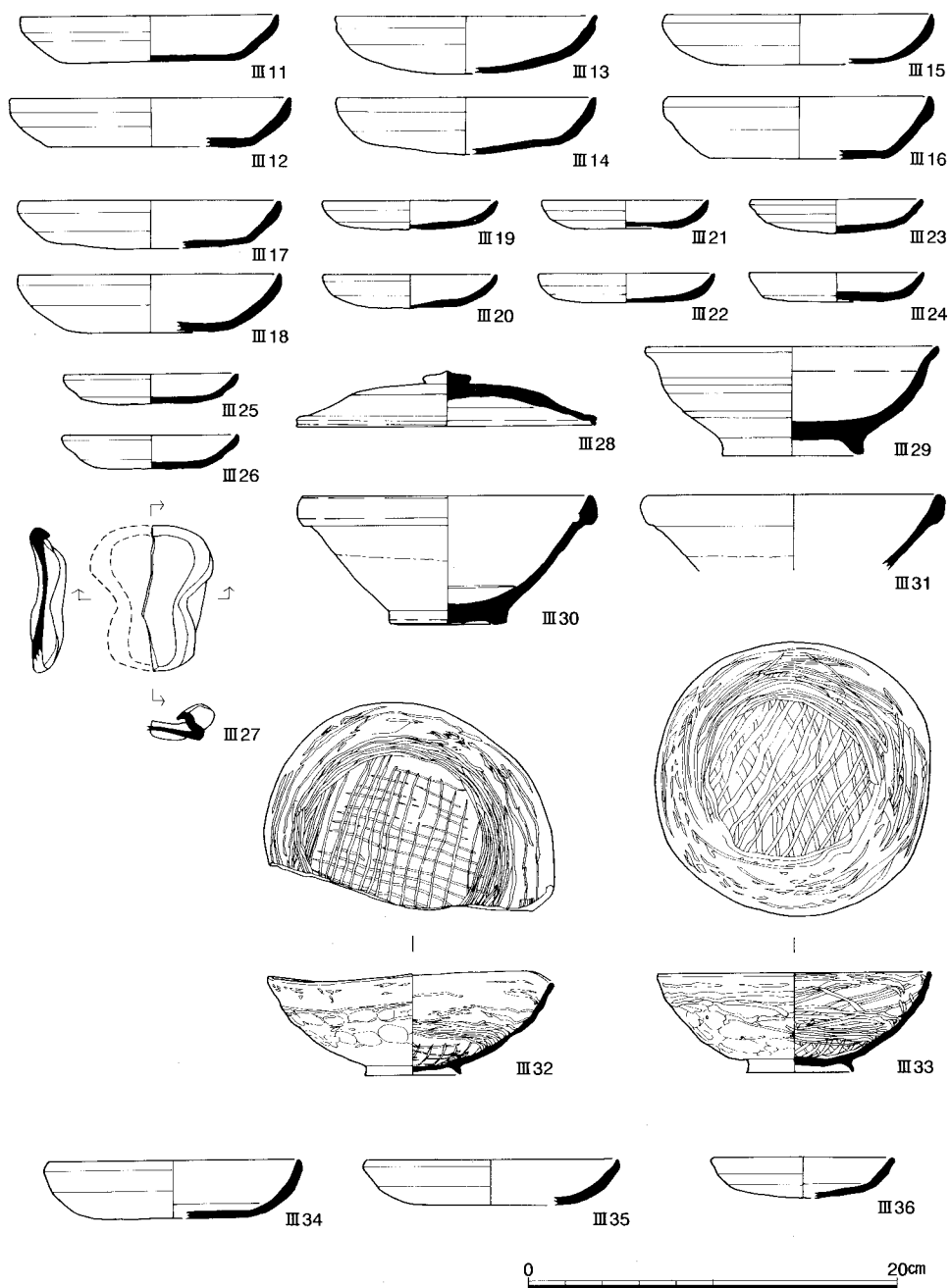


図51 SE2 出土遺物 (Ⅲ11～Ⅲ27土師器, Ⅲ28須恵器, Ⅲ29灰釉系陶器, Ⅲ30・Ⅲ31白磁, Ⅲ32・Ⅲ33瓦器), SK1 出土遺物 (Ⅲ34～Ⅲ36土師器)

# 出土遺物

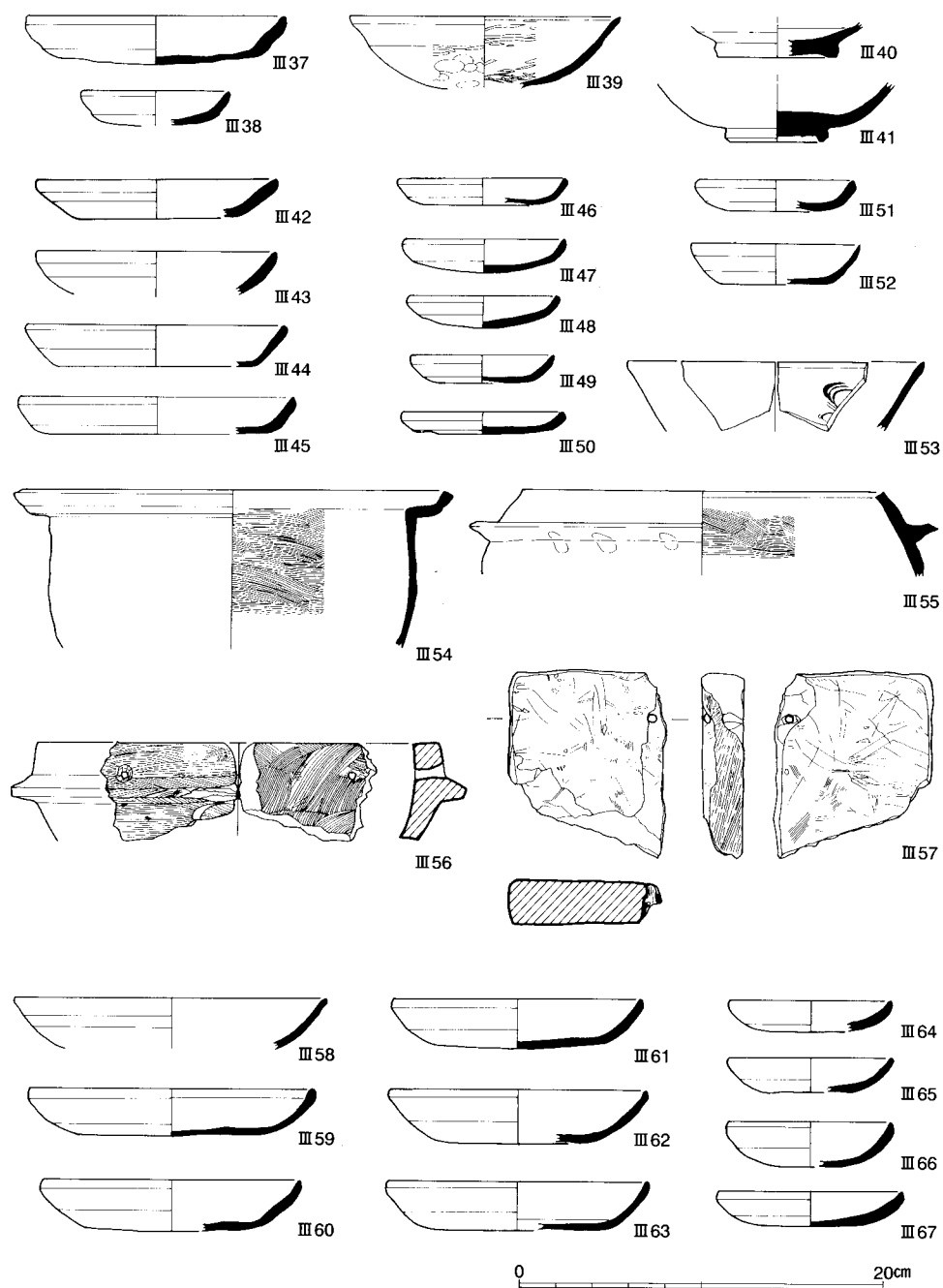


図52 SE1 出土遺物 (Ⅲ37・Ⅲ38・Ⅲ42～Ⅲ52土師器, Ⅲ39・Ⅲ54・Ⅲ55瓦器, Ⅲ40白磁, Ⅲ41・Ⅲ53青磁, Ⅲ56石鍋, Ⅲ57滑石製品), SK4 出土遺物 (Ⅲ58～Ⅲ67土師器)

ほかは橙褐色から褐色である。口縁形態は、Ⅲ68・Ⅲ69がC<sub>3</sub>類、Ⅲ70・Ⅲ71・Ⅲ78～Ⅲ80がD<sub>4</sub>類、Ⅲ72・Ⅲ73・Ⅲ81がD<sub>5</sub>類、Ⅲ74～Ⅲ77がD<sub>3</sub>類と多様であるが、法量はⅢ68～Ⅲ73が口径14～15cm（AⅠ）、Ⅲ74～Ⅲ81が9.5cm前後（AⅡ）とまとまりがよい。Ⅲ82は回転台調整の土師器皿。灰白色で、糸切り底である。Ⅲ83は灰釉系陶器。底部は糸切りで、断面三角形の高台がつく。Ⅲ84は瓦器鍋。口縁受部は2段に屈曲し、体部はややふくらむ。Ⅲ85は和泉型瓦器椀。見込みに斜格子状暗文をほどこしたのち体部内面に螺旋状暗文をほどこす。外面の暗文は、非常にまばら。高台は三角形に突出する。Ⅱ－3期〔尾上1983〕。

SE2・SK1・SE1・SK4・SD3 出土遺物は、12世紀後葉から13世紀初頭ごろの資料である。

**SK9 出土遺物**（Ⅲ86～Ⅲ92） いずれも橙褐色の土師器皿。Ⅲ86・Ⅲ87が口径13.5～14.5cmのAⅠ、Ⅲ88～Ⅲ92が9.5cm前後のAⅡ。口縁形態は、Ⅲ86がC<sub>3</sub>類、Ⅲ87・Ⅲ89～Ⅲ91がD<sub>4</sub>類、Ⅲ88がD<sub>3</sub>類、Ⅲ92がD<sub>5</sub>類。Ⅲ89～Ⅲ92の口縁部には煤が付着している。

**SK6 出土遺物**（Ⅲ93～Ⅲ101） いずれも土師器皿で、Ⅲ92が灰白色のほかは橙褐色から灰褐色である。Ⅲ93～Ⅲ96が口径13.5～15cmのAⅠ、Ⅲ97～Ⅲ101が9.5cm前後のAⅡ。口縁形態は、Ⅲ93～Ⅲ95・Ⅲ99・Ⅲ100がD<sub>4</sub>類、Ⅲ96・Ⅲ101がD<sub>5</sub>類、Ⅲ97・Ⅲ98がD<sub>3</sub>類。

**SK13 出土遺物**（Ⅲ102～Ⅲ106） Ⅲ102～Ⅲ105は橙褐色の土師器皿。口径は、Ⅲ102が口径14cm、ほかは9～9.5cm。Ⅲ102はD<sub>3</sub>類、Ⅲ103はD<sub>4</sub>類、Ⅲ104・Ⅲ105はD<sub>5</sub>類。Ⅲ106は回転台調整の土師器皿。灰白色で、底部は糸切りである。

**SE3 出土遺物**（Ⅲ107～Ⅲ139） Ⅲ107～Ⅲ129は橙褐色から灰褐色の土師器皿。Ⅲ107～Ⅲ115が口径13.5～14cmのAⅠ、Ⅲ116～Ⅲ129が9cm前後のAⅡ。口縁形態は、D<sub>5</sub>類（Ⅲ107～Ⅲ111・Ⅲ116～Ⅲ120）、D<sub>4</sub>類（Ⅲ112・Ⅲ113・Ⅲ123～Ⅲ129）を主体に、D<sub>3</sub>類（Ⅲ114・Ⅲ115）を含む。Ⅲ130は橙褐色を呈する土師器受皿。Ⅲ131～Ⅲ133は土師器鉢。いずれも粘土紐巻き上げで成形し、外面は輪積痕を残す粗い撫でで仕上げる。内面は丁寧に撫でて仕上げているが、Ⅲ133は撫でが不十分で、輪積痕が部分的に残っている。法量は、Ⅲ133が口径17.5cm、高さ10.8cmをはかる。Ⅲ131は口径が12.6cmで、Ⅲ133と比較して一回り小さい。Ⅲ134は灰白色を呈する土師器小壺。底面には糸切痕が残り、高台が剝落する。Ⅲ135は細かい貫入のはいる龍泉窯系青磁椀。椀Ⅰ－1a類。Ⅲ136・Ⅲ137は瓦器羽釜。いずれも口縁端部には面取りを施し、底部から鰐下面から体部にかけて煤が厚

出土遺物

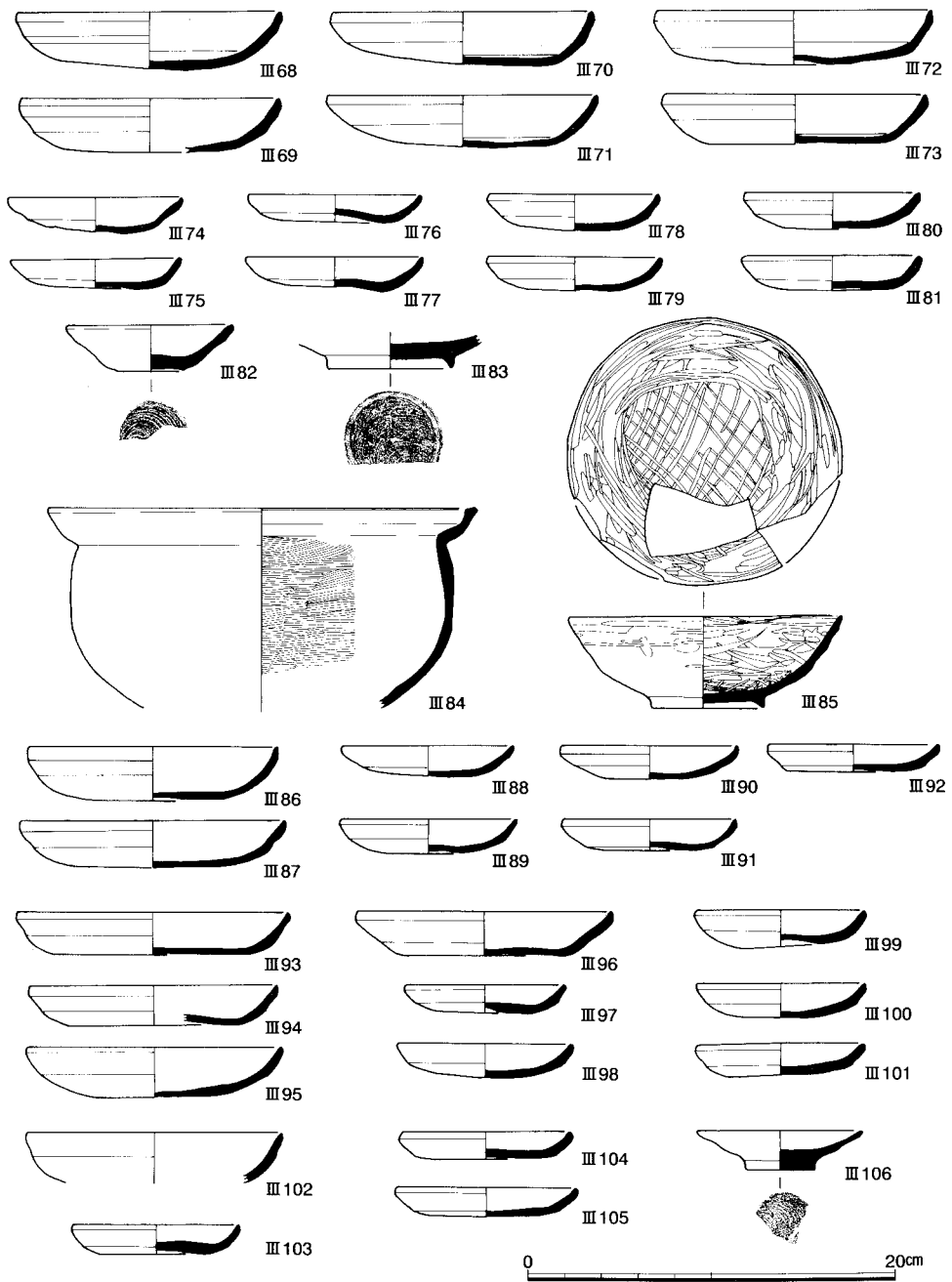


図53 SD3 出土遺物 (Ⅲ68～Ⅲ82土師器, Ⅲ83灰釉系陶器, Ⅲ84・85瓦器), SK9 出土遺物 (Ⅲ86～Ⅲ92土師器), SK6 出土遺物 (Ⅲ93～Ⅲ101土師器), SK13 出土遺物 (Ⅲ102～Ⅲ106土師器)

京都大学本部構内 AW26 区の発掘調査

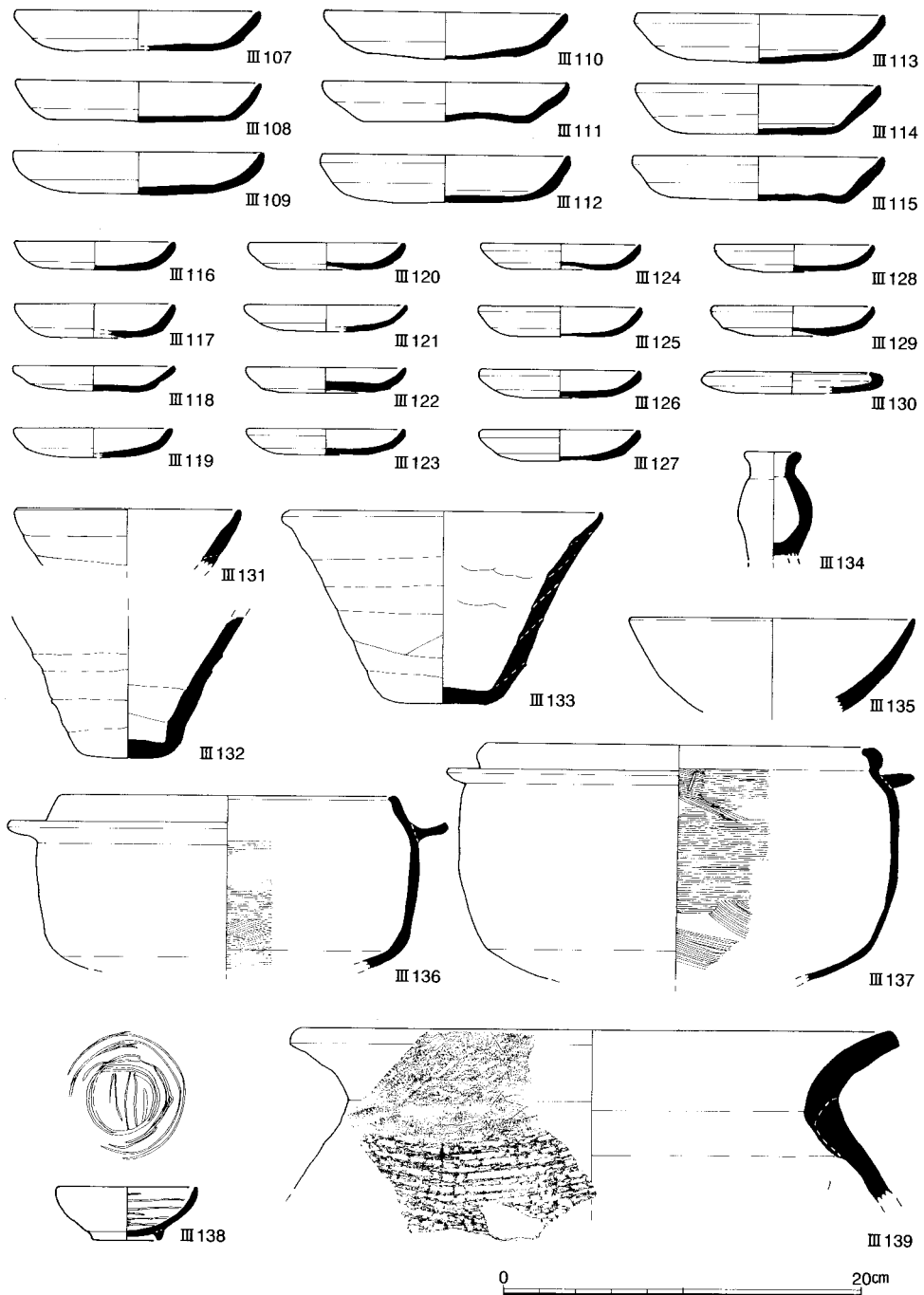


図54 SE3 出土遺物（Ⅲ107～Ⅲ134土師器，Ⅲ135青磁，Ⅲ136～Ⅲ139瓦器）

# 出土遺物

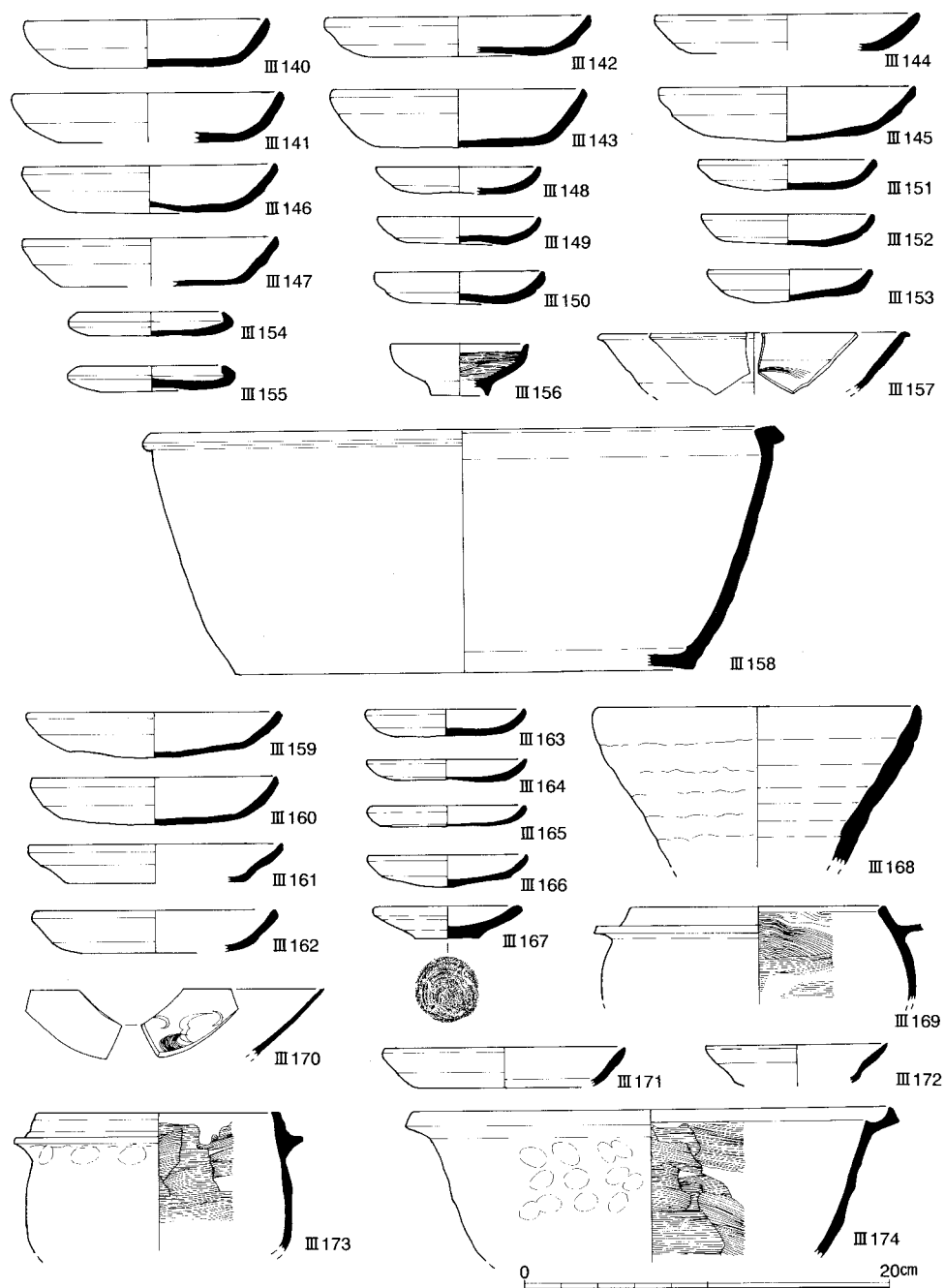


图55 SK8出土遺物 (III 140~III 155土師器, III 156瓦器, III 157白磁, III 158黄釉陶器), SK10出土遺物 (III 159~III 168土師器, III 169瓦器, III 170白磁), SK12出土遺物 (III 171・III 172土師器, III 173・III 174瓦器)

く付着する。Ⅲ137は鏝貼り付け時の強い撫でにより、口縁直下が凹んでいる。Ⅲ138は瓦器小椀。外面は撫でて仕上げ、見込みにはジグザグの暗文、内面には螺旋状暗文を施している。楠葉型であろう。Ⅲ139は瓦器甕。体部外面に格子状叩き目を残す。

**SK8 出土遺物**（Ⅲ140～Ⅲ158） Ⅲ140～Ⅲ153は橙褐色ないし灰褐色の土師器皿。Ⅲ140～Ⅲ147が口径13～15cmのAⅠ，Ⅲ148～Ⅲ153が9～9.5cmのAⅡ。Ⅲ140・Ⅲ141・Ⅲ148～Ⅲ150がD<sub>3</sub>類，Ⅲ142～Ⅲ144・Ⅲ151～Ⅲ153がD<sub>4</sub>類，Ⅲ145～Ⅲ147がD<sub>5</sub>類。Ⅲ154・Ⅲ155は橙褐色の土師器受皿。Ⅲ156は楠葉型の瓦器小椀。外面は撫で調整，内面は螺旋状暗文を施す。見込みの大部分は欠損するが，暗文が一部残存している。Ⅲ157は内面に櫛描文をもつ白磁碗。碗V-4類。Ⅲ158は黄釉陶器盤。口縁部は外側に肥厚し，内面は無文である。盤Ⅱ-1a類。

SK9・SK6・SK13・SE3・SK8 出土遺物は，13世紀前葉であろう。

**SK10 出土遺物**（Ⅲ159～Ⅲ170） Ⅲ159～Ⅲ166は橙褐色の土師器皿。Ⅲ159～Ⅲ162が口径13.5～14cmのAⅠ，Ⅲ163～Ⅲ166が8.5～9cmのAⅡ。Ⅲ159・Ⅲ164がD<sub>2</sub>で，残りはD<sub>5</sub>類。Ⅲ167は灰白色で，回転台調整の土師器皿。底部は糸切り調整。Ⅲ168は土師器鉢。粘土紐巻き上げで成形し，内面は撫でて仕上げている。口縁端部は尖り気味におさめる。Ⅲ169は瓦器羽釜。鏝下面から体部に煤が薄く付着する。Ⅲ170は内面に劃花文を描く白磁碗。13世紀中葉～後葉ごろ。

**SK12 出土遺物**（Ⅲ171～Ⅲ174） Ⅲ171・Ⅲ172は橙褐色の土師器皿。口径はⅢ171が13cm，Ⅲ172が10cmをはかり，口縁形態はともにE<sub>3</sub>類である。Ⅲ173は口径12.4cmをはかる小型の瓦器羽釜。口縁端部は面取りにより外傾する。鏝下面から体部に煤がわずかに付着している。Ⅲ174は瓦器鍋。口縁部の2段の屈曲が形骸化し口縁部の面取りにその痕跡をとどめている。煤の付着は観察されない。14世紀中葉ごろ。

**SE4 裏込め出土遺物**（Ⅲ175～Ⅲ181） Ⅲ175～Ⅲ179は土師器皿。Ⅲ175・Ⅲ176は橙褐色で，口径はⅢ175が12.6cm，Ⅲ176が10.6cmをはかり，ともにD<sub>5</sub>類。Ⅲ177・Ⅲ178は橙褐色，Ⅲ179は灰白色で，口径は7.5～8.5cmをはかる。いずれもD<sub>2</sub>類。Ⅲ180は灰白色を呈するD<sub>2</sub>類土師器碗。Ⅲ181は瓦器羽釜。鏝下面から体部に煤が薄く付着する。

**SE4 井戸側出土遺物**（Ⅲ182～Ⅲ288） Ⅲ182～Ⅲ221は赤褐色を呈する土師器皿。口縁1/6以上残存する個体による口縁部計測法で，30.3個体をはかる。口縁形態は，D<sub>2</sub>類（Ⅲ182～Ⅲ184・Ⅲ206～Ⅲ210）・D<sub>5</sub>類（Ⅲ185～Ⅲ193・Ⅲ211・Ⅲ212）・D<sub>6</sub>類（Ⅲ194～Ⅲ197・Ⅲ213～Ⅲ215）・E<sub>1</sub>類（Ⅲ198・Ⅲ216・Ⅲ218・Ⅲ219）・E<sub>2</sub>類（Ⅲ199・Ⅲ200・Ⅲ

217)・E<sub>3</sub>類(Ⅲ201～Ⅲ205・Ⅲ220・Ⅲ221)と多様である。量的には、E<sub>3</sub>類が33%、D<sub>2</sub>類が21%を占め、残りはいずれも10%前後である。

口径は、11～13cm台のAⅠと7～9cm台のAⅡに大きく区分できるが、D<sub>2</sub>類・D<sub>5</sub>類・D<sub>6</sub>類が12.5cm前後と8.5cmにピークをもつものに対して、E<sub>1</sub>類～E<sub>3</sub>類は11～12cm台と8cm前後にピークをもち、法量にややばらつきが認められる。

Ⅲ222～Ⅲ226は灰白色を呈する土師器受皿。Ⅲ222は底面に墨書をもつ。

Ⅲ227～Ⅲ271は灰白色を呈する土師器碗。残存率1/6以上を対象にした口縁部計測法で、45.3個体をはかる。皿と同様に、口縁形態はD<sub>2</sub>類(Ⅲ227～Ⅲ230)・D<sub>3</sub>類(Ⅲ231～Ⅲ233)・D<sub>5</sub>類(Ⅲ234～Ⅲ238)・E<sub>1</sub>類(Ⅲ239～Ⅲ244・Ⅲ253～Ⅲ255・Ⅲ257～Ⅲ267)・E<sub>2</sub>類(Ⅲ245～Ⅲ252・Ⅲ256・Ⅲ268～Ⅲ271)と多様であるが、量的にはE<sub>1</sub>類が50%と半数を占め、E<sub>2</sub>類21%、D<sub>2</sub>類16%、D<sub>5</sub>類11パーセントと続き、D<sub>3</sub>類は1%を占めるにすぎない。口径は、11～13cmにピークをもつAⅠと6～9cm台にピークをもつAⅡに区分できるが、皿同様、D<sub>2</sub>類・D<sub>5</sub>類が13cm前後と9cm前後にピークをもつものに対して、E<sub>1</sub>類・E<sub>2</sub>類は12cm前後と7cm前後にピークをもち、法量に違いがみられる。また、口径7cm前後の一群は、凹底となるものが主体を占める。Ⅲ247は底面および内面に墨書がみられる。

Ⅲ272～Ⅲ281は回転台調整の土師器皿。口径8～10cm、高さ1.5～2cmの小皿(Ⅲ272～Ⅲ280)と口径14.2cm、高さ3.2cmの杯形の皿(Ⅲ281)がある。灰白から黄褐色を呈する。胎土は粗放で、気泡がみられる。口縁部内外面は回転撫で、見込みは静止撫で。底部は回転糸切りしており、Ⅲ272・Ⅲ274・Ⅲ276・Ⅲ281は木目状圧痕をもつ。

Ⅲ282は灰釉系陶器碗。底部を糸切りの後、断面三角形の高台を貼り付ける。高台に榎殻痕をもつ。Ⅲ283は瓦器のミニチュア羽釜。口縁部に3条の沈線が横走する。脚がついたと思われる痕跡が体部にわずかに観察される。煤・炭化物の付着はみられない。Ⅲ284・Ⅲ285は瓦器鍋。口縁部を2段に屈曲させ受部を作出するが、Ⅲ284は口縁部への立ち上がり部分が短い。ともに外面に煤が付着。Ⅲ286・Ⅲ287は瓦器羽釜。鋳下面から体部に煤付着。Ⅲ288は瓦器盤。内外面とも、横撫でを施すが、体部下半には指押さえの痕が残る。底部外面には、榎殻付着痕をもつ。

SE4裏込め出土資料は、13世紀後葉に遡るが、井戸廃絶時の資料は14世紀前葉ごろのものであろう。

#### (4) 瓦 類 (図版25・26, 図59～61)

Ⅲ289～Ⅲ297は軒丸瓦。Ⅲ289は、単弁8葉の蓮華文軒丸瓦。Ⅲ290は右巻三巴文軒丸

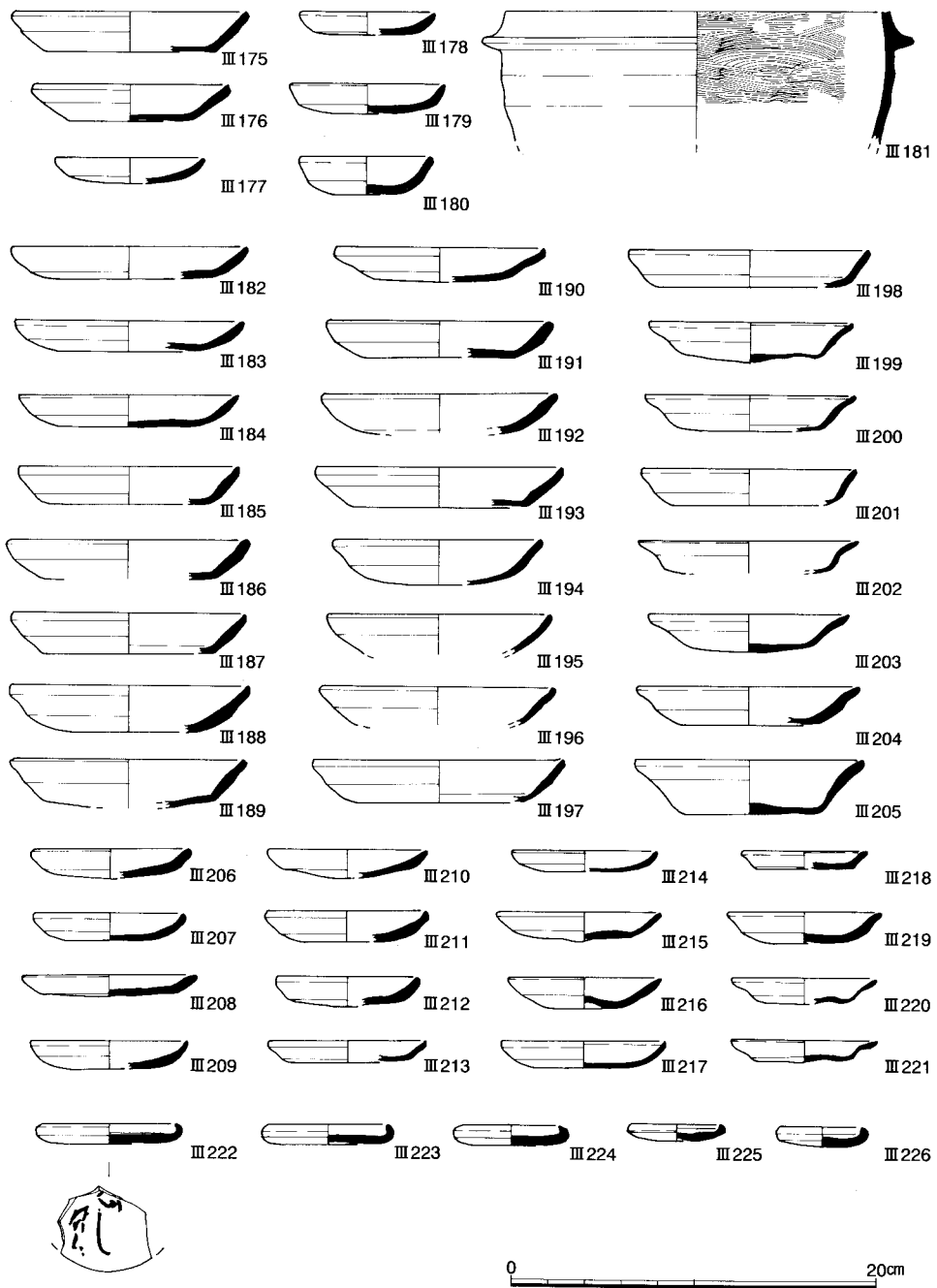


図56 SE4 出土遺物(1) (Ⅲ175～Ⅲ180・Ⅲ182～Ⅲ226土師器, Ⅲ181瓦器)

出土遺物

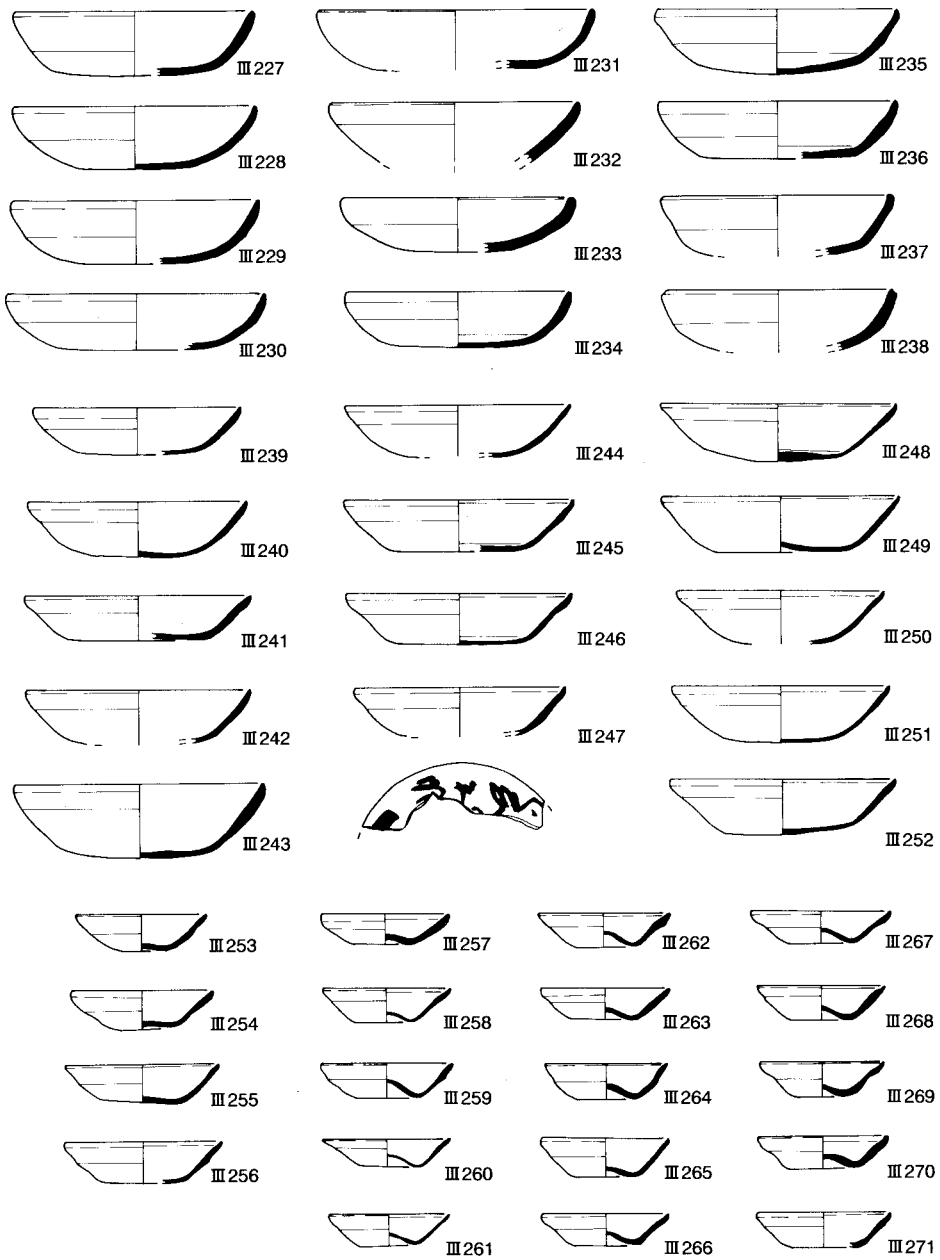


図57 SE4 出土遺物(2) (Ⅲ227～Ⅲ271土師器)

京都大学本部構内 AW26 区の発掘調査

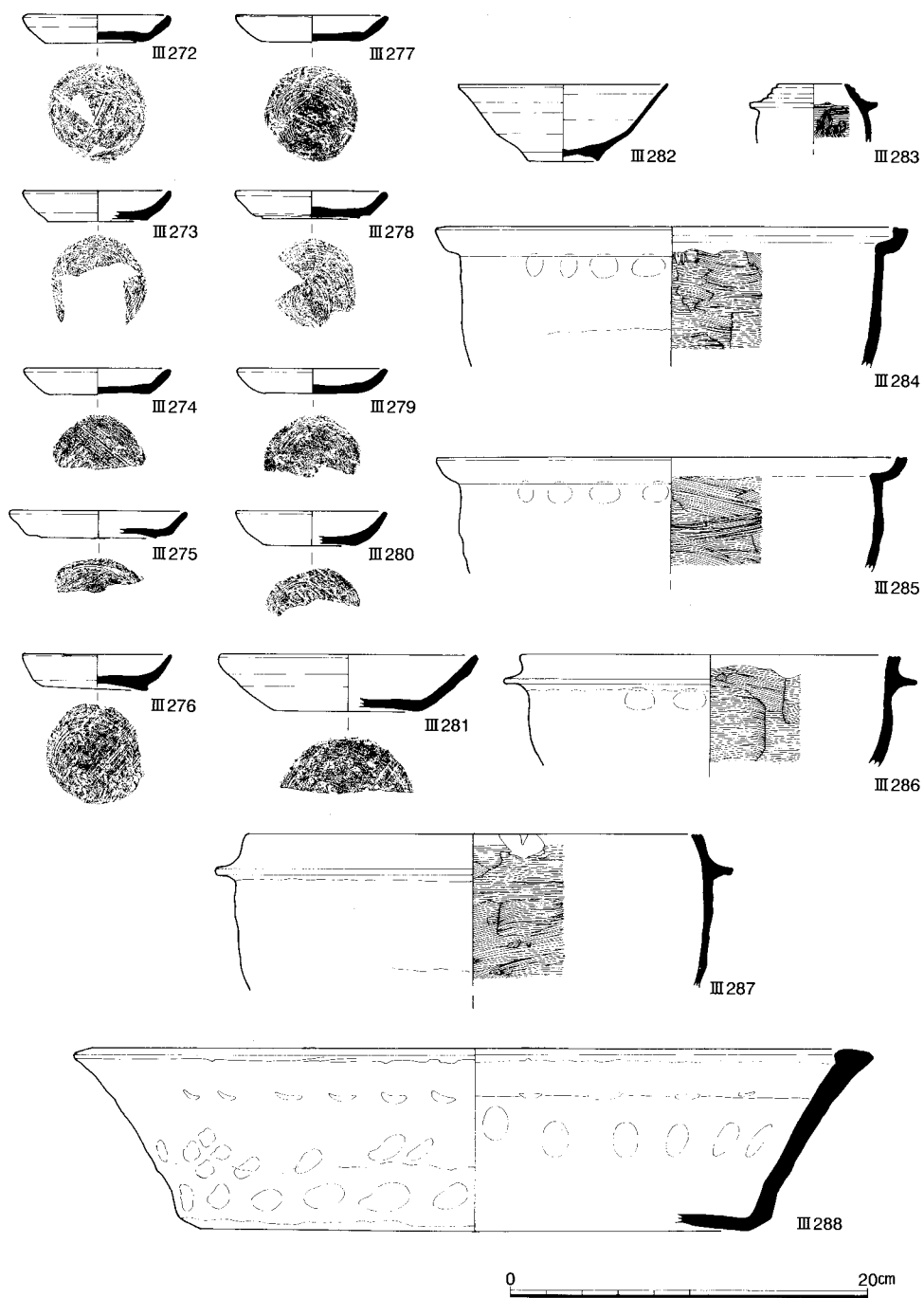


図58 SE4 出土遺物(3) (III 272～III 281土師器, III 282灰釉系陶器, III 283～III 288瓦器)

瓦。Ⅲ291～Ⅲ297は外区に珠文を置く巴文軒丸瓦で、Ⅲ291～Ⅲ294は右卷二巴文、Ⅲ295は右卷三巴文、Ⅲ296は左卷三巴文、Ⅲ297は右卷の巴文である。

Ⅲ298～Ⅲ317は軒平瓦。いずれも瓦当は折り曲げ技法で作出する。Ⅲ298・Ⅲ299は、海草状の繊細な唐草文で構成される。Ⅲ300～Ⅲ306は、同範と見られる唐草文からなる。平瓦の凹面には布目、凸面には縄叩きの痕が残る。Ⅲ307～Ⅲ309も唐草文。平瓦凸面を、Ⅲ308とⅢ309は斜格子叩き、Ⅲ309は撫でによって仕上げているが、Ⅲ307とⅢ308には平瓦凸面に同一の窠記号「光」がある。Ⅲ310は左卷三巴文を連ねる。

Ⅲ311～Ⅲ317は剣当文軒平瓦。Ⅲ311は中心に巴文を配する。剣当文軒平瓦は、曲げ皺があり瓦当上端の面取りが明瞭なⅢ311～Ⅲ313・Ⅲ316と、曲げ皺を撫で消し、瓦当面がやや狭く瓦当上端の面取りが不明瞭なⅢ314・Ⅲ315・Ⅲ317に大別できる。年代的には、後者が新しい〔上原1995〕。

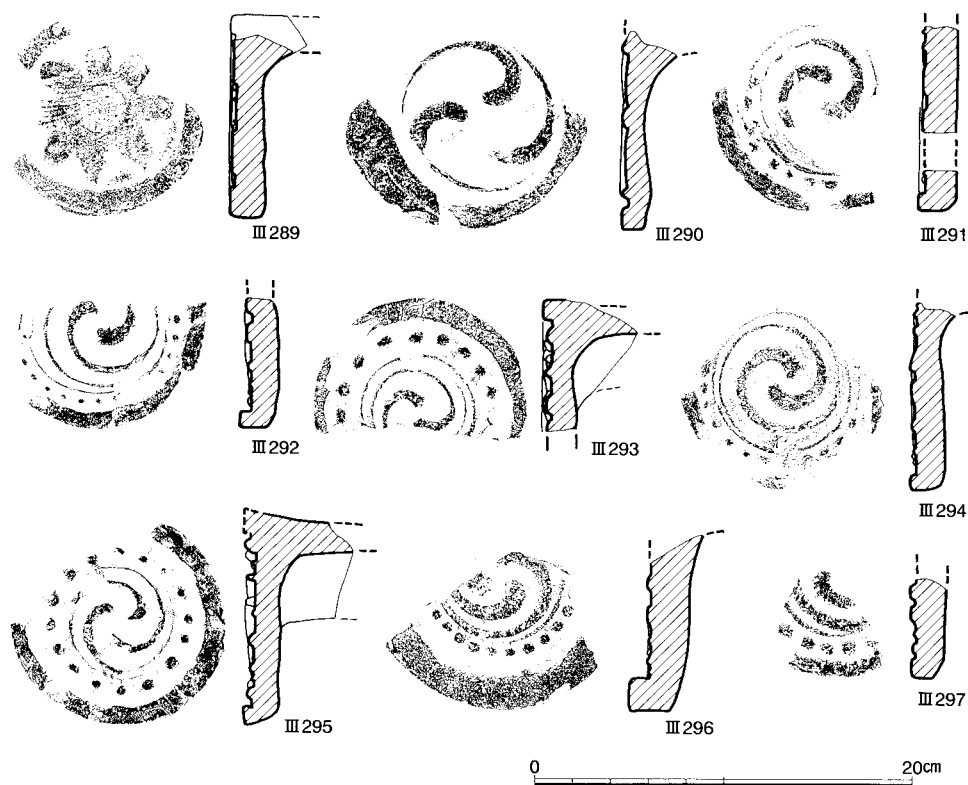


図59 軒丸瓦（Ⅲ289～Ⅲ292・Ⅲ297SK1出土，Ⅲ293・Ⅲ295・Ⅲ296SE4出土，Ⅲ294茶褐色土出土）

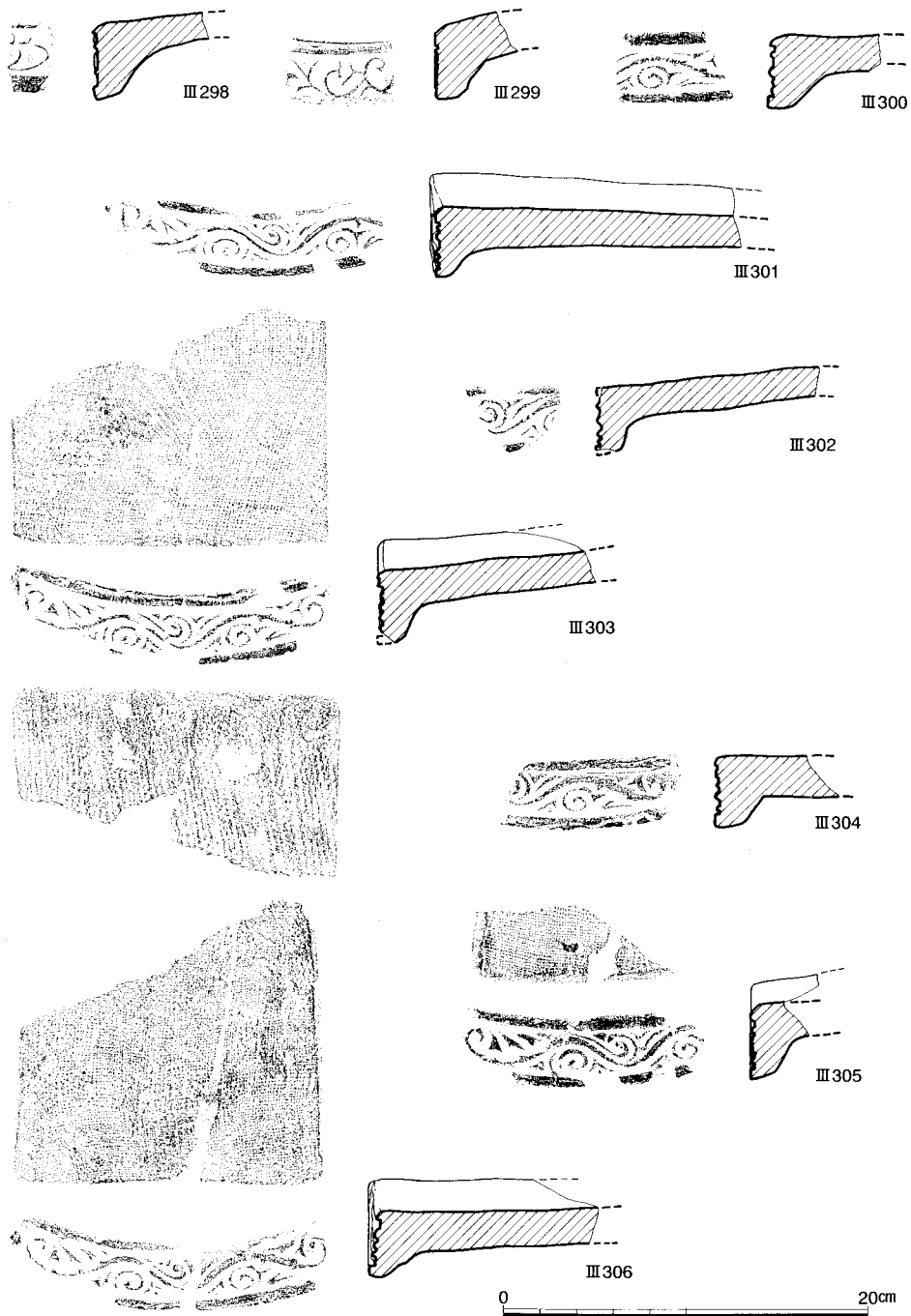


図60 軒平瓦(1) (Ⅲ298～Ⅲ306SK1 出土)

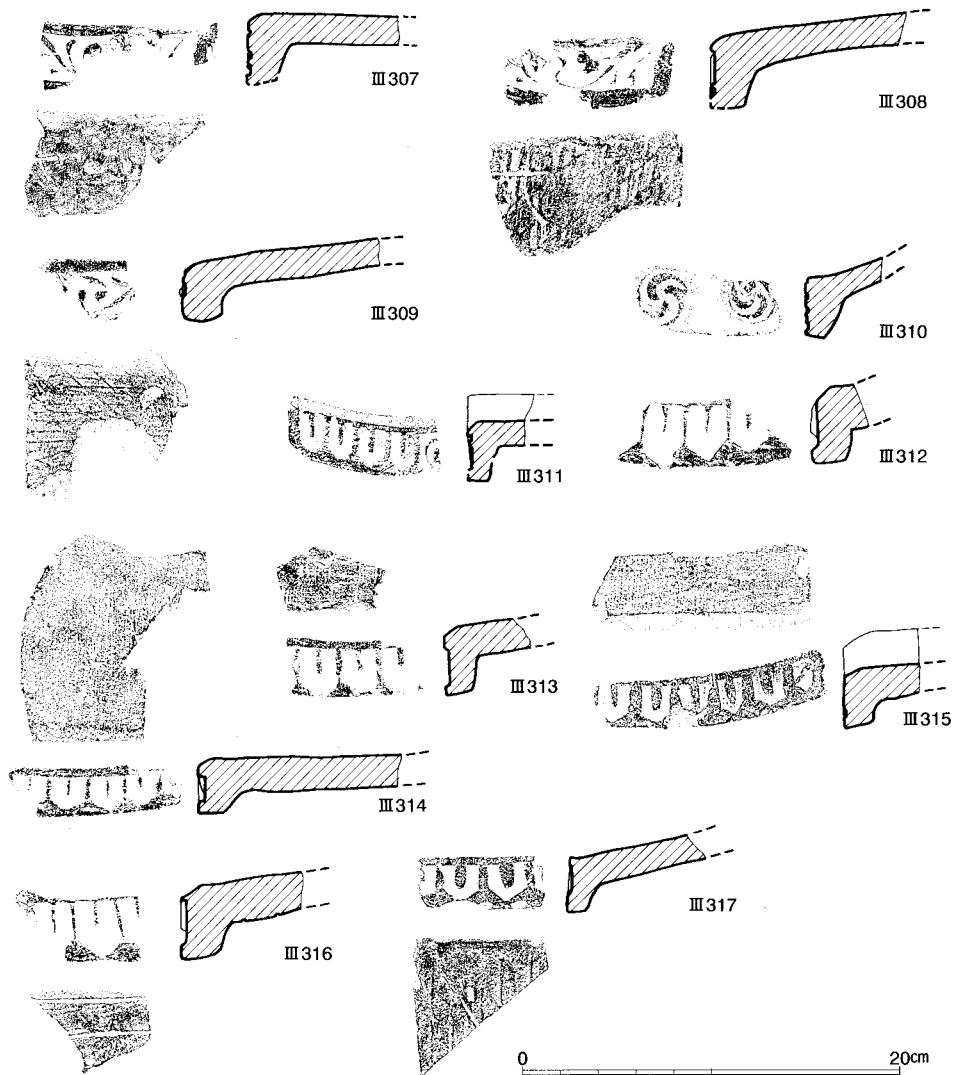


図61 軒平瓦(2) (Ⅲ307～Ⅲ309・Ⅲ312・Ⅲ313・Ⅲ316SK 1出土, Ⅲ310SE1出土, Ⅲ311・Ⅲ314・Ⅲ315・Ⅲ317SE4出土)

これらの軒瓦は、隣接する218・230・241地点でも同型ないし同文のものが複数出土している〔千葉・吉井ほか1997, 古賀1999〕。12世紀後半～13世紀中頃までの年代幅に収まる瓦が主体を占めると理解する。

(5) 木製品 (図62)

Ⅲ318～Ⅲ321は SE1 水溜から出土した円形曲物で、Ⅲ322はⅢ320とⅢ321を合成した実

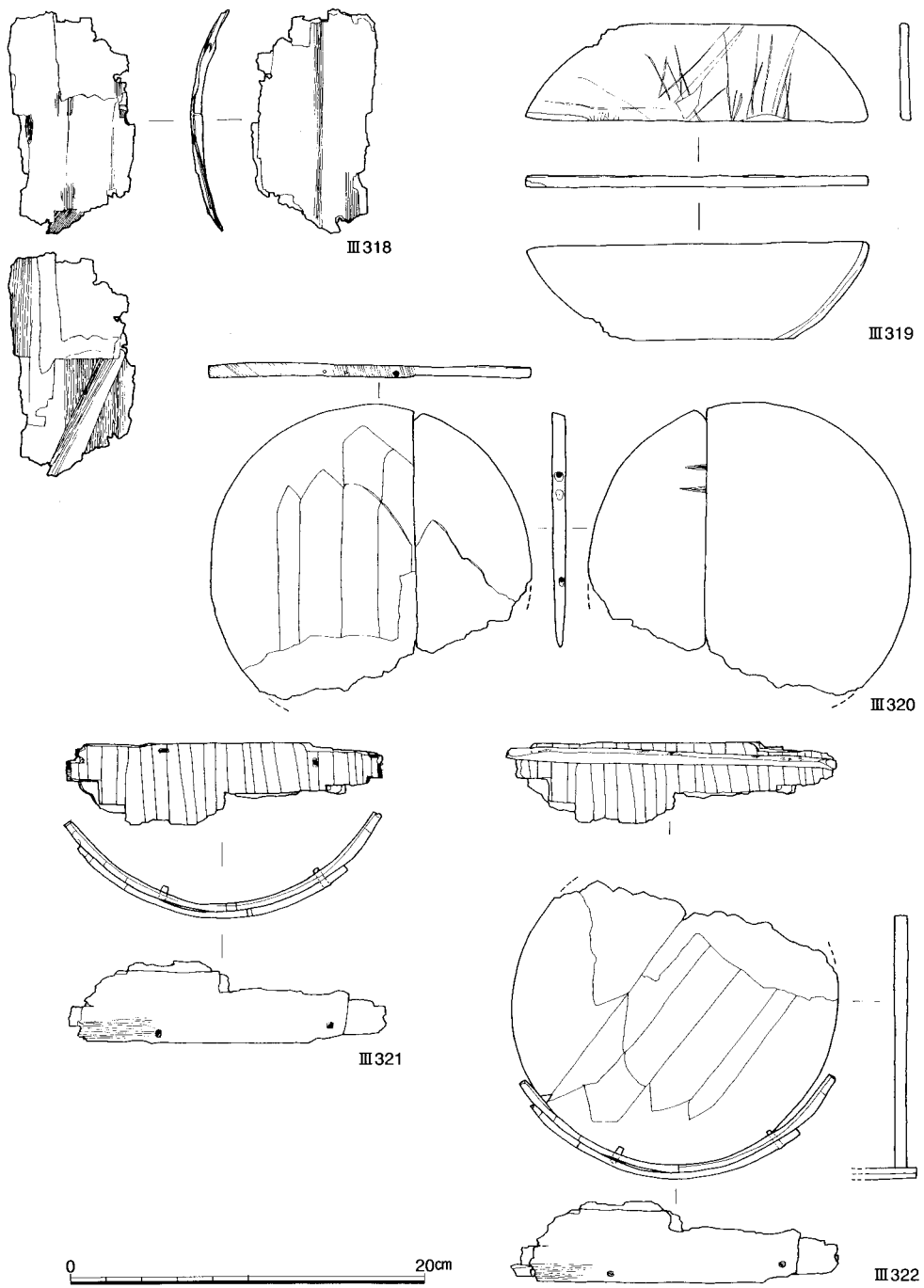


図62 木製品（Ⅲ318～Ⅲ322SE1 水溜出土）

測図である。Ⅲ318は側板で、復元径24cm。厚さ1～2mmの柾目薄板が2重に重なっている。Ⅲ319は底板。復元径20cm。厚さ6mmをはかる柾目板で、側面に木釘、木釘穴は観察されなかった。Ⅲ320とⅢ321は、遊離した状態で出土しているが、木釘と木釘穴の位置が一致するので、同一個体の釘結合曲物であろう。復元径19cm。底板（Ⅲ320）は一度2つに破損しており、木製の軸を埋め込んで補修した痕跡が3箇所観察される。この補修にともない、側板も取り付け直したものとみえ、底板には側板と対をなす釘穴以外に、側板と対をなさない補修以前の釘穴が観察できる。側板（Ⅲ321）の内面には、縦方向のケビキをほどこす。

(6) 近世の遺物（図版21，図63）

Ⅲ323～Ⅲ339は、SD1出土遺物。Ⅲ323・Ⅲ324は見込みに圀線がめぐる土師器皿。Ⅲ324は口縁端部に煤が付着する。

Ⅲ325～Ⅲ332は陶器。Ⅲ325・Ⅲ326は京都・信楽系の無文平碗。高台は時計回りの轆轤回転を用いて削り出す。Ⅲ325は胎土、釉ともに灰白色，Ⅲ326は胎土、釉ともに黄白色を呈する。Ⅲ327は陶器碗。赤褐色の胎土に、灰白色を呈する釉と鉄釉をいっちゃん掛けで施す。Ⅲ328・Ⅲ329は京都・信楽系の灯明皿と脚付き灯明受皿。Ⅲ328は外面，Ⅲ329は底面と受部の端部を露胎とし，黄灰色の釉を施す。Ⅲ328は胴下半から底面を，Ⅲ329は底面

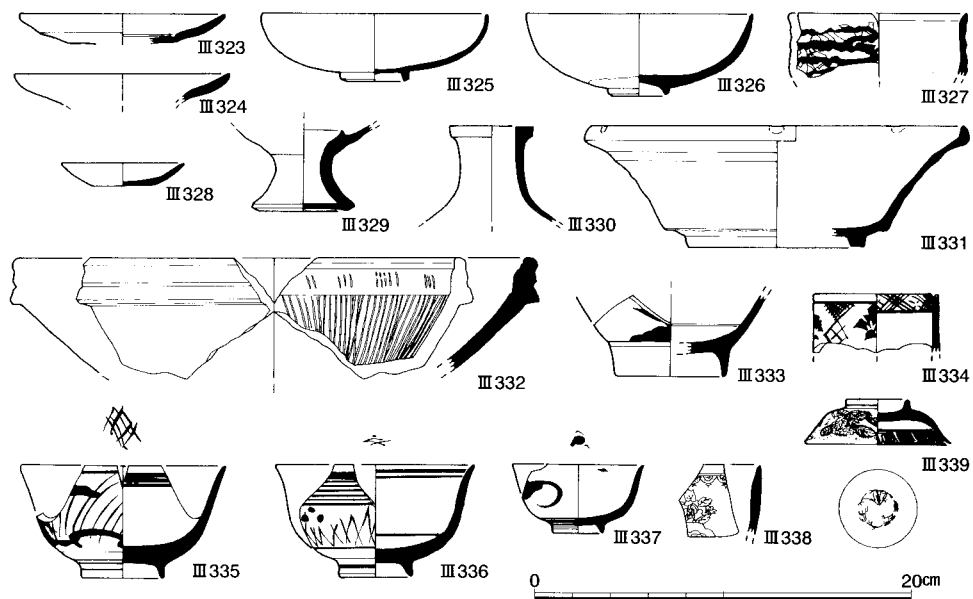


図63 SD1出土遺物（Ⅲ323・Ⅲ324土師器，Ⅲ325～Ⅲ332陶器，Ⅲ333～Ⅲ339磁器）

を、時計回り轆轤回転を用いて、鋭削りしている。Ⅲ329の底面には、墨書がみえるが、判読不能。Ⅲ320は灰釉のかかる瓶形で、瀬戸・美濃系徳利の口縁部である。Ⅲ331は底面をのぞいて鉛釉を施し、口縁部内外面の3箇所、青白色を呈する釉を吹き付けた鉢。口縁端部を5箇所、内側にくぼませて輪花状に作り出しており、見込みには目跡が7箇所残る。Ⅲ332は堺・明石系のすり鉢。

Ⅲ333～Ⅲ339は磁器染付。Ⅲ333は広東碗、Ⅲ334は筒形碗、Ⅲ335～Ⅲ337は端反り碗、Ⅲ338は筒形碗で、口縁部を口銹とし、銅板刷りで草花文を描く。Ⅲ339は蓋。濃青色の呉須を用いて草花文を3単位描く。

SD1 出土遺物は、幕末期を中心としつつも19世紀前半のもの、Ⅲ338のように明治時代に下るものを含んでいる。

## 5 小 結

調査地点は、約7割が旧校舎の基礎などにより無遺物層まで掘り込まれ、また大学造成時の整地によって中・近世の遺物包含層もかなりの部分が削平を受けており、遺跡の残存はけっしてよいものとはいえなかった。このような状況ではあったけれども、とくに中世を中心として、この地一帯の土地利用の変遷に関する情報を得ることができた。北に隣接する調査区であり、一連の遺跡と理解しうる218・230・241地点の調査成果〔千葉・吉井ほか1997, 古賀1999〕もあわせて(図48)、調査の意義と今後の課題をまとめておきたい。

**縄文・弥生時代の遺跡** この時代の遺構はみつからなかったが、遺跡の広がりや微地形の復元にかかわる資料が得られたのが成果である。

遺跡の広がりについては、縄文土器26点と石器2点が出土した。それらの帰属年代から縄文早期、中期、後期の遺跡の存在が予測される。本来の遺物包含層から出土しているのは1点のみで、ほかはすべて歴史時代の包含層や遺構から出土したものである。当時の状況を直接反映したものと考えすることはできないものの、218地点では縄文後期土器1185点、石器5点、230・241地点では縄文中・後期土器100点前後と石器1点が見つかっている状況を勘案すれば、遺物の分布密度は低下しているといえる。後世の削平などによる遺構や遺物包含層の消失などを考慮する必要があるけれども、縄文時代の遺跡については、北ないしは西への広がりを想定しておきたい。

微地形については、弥生前期末中期初頭ごろの洪水砂の分布から、本調査区は北側の調

査区とともに、北東から南東に伸びる微高地上に位置することが判明した。218地点で多数見つかった縄文遺物は、この微高地の北西側に形成された谷部につながる斜面上に残されたものであり、また本調査区の東側に位置する立合調査区における洪水砂の存在は、本調査区の南東側が谷状に落ち込むことを示すものである。このように現状では一様に見える地形も、弥生中期以前では微高地と低地が入り組んだ複雑な地形を呈していたことがうかがわれる。

**古墳時代の遺跡** 調査区東辺で溝 SD2 が検出され、7 世紀前半の須恵器が出土した。この時代の遺構は、230地点では完形の蓋杯をともなう土坑 SK17・SK18 があり、墓壙の可能性が指摘されている。また218地点では、円形にめぐる濠状遺構 SX1 にたいして終末期古墳の周濠の可能性も考慮されている。溝 SD2 はごく一部が検出されたのにとどまり、その性格を限定するのは困難といわざるを得ないが、完形に近い須恵器杯・高杯が出土したことは、古墳の周濠の可能性を示唆するものかもしれない。いずれにしても、調査地付近一帯には、7 世紀前半、古墳時代終末期の遺跡の存在、とくに古墳などの墳墓の存在が予測しうる。隣接地における調査では、十分に留意する必要がある。

**中世の土地利用** この地において活動の痕跡がもっとも濃密に残っていたのがこの時代である。本調査区の中世遺構の特徴としては、井戸が4基見つかったことである。218地点の1基を加えて5基の井戸がこの地に設けられていた。本部構内の本調査区周辺以外の地点では、従来、中世の井戸は90地点で13世紀ごろのものが1基〔五十川1983〕、219地点で井戸の可能性のある13世紀の大土坑が1基〔千葉・吉井ほか1997〕みついているにすぎないので、水の得にくい、北白川扇状地の扇央にあたる本部構内においては、井戸が集中的に設けられた地区とみるのが可能である。

また、かなりの部分が後世に削平をうけているので、かろうじて破壊をまぬがれた部分で検出された土坑・溝など、掘り込みの浅い遺構についてはすでに消失していることを十分に考慮するとしても、北に隣接する230・241地点では多数の溝が見つかったのにもかかわらず井戸は見つかっていないから、北側の溝群にたいして南側の井戸集中区という遺構の偏在性を指摘してもよいであろう。

これらの井戸の大半は、13世紀前半にはその機能を失っており、230地点を中心にみつかった溝の多くも、13世紀中葉にはその役割を終えている。廃棄されている瓦が12世紀後半～13世紀中頃のもの为主体とすることも勘案すれば、12世紀後葉から13世紀中頃にかけて、溝で区画された敷地内に瓦葺き建物と井戸をともなうような邸宅が存在したことが想

定できる。すなわち、本調査区一帯の中世の土地利用は、12世紀後葉に居住地としての本格的な開発が始まり、13世紀前葉にかけて活動の活発な時期を迎えた。13世紀中葉ごろには溝や井戸の多くが廃絶されて活動が衰えた、と理解できる。ただし、13世紀後葉にも活動の痕跡は見られ、14世紀前葉には廃絶する井戸 SE4 はこの頃から機能していた可能性が高い。14世紀代の遺構は、この SE4 以外には14世紀中葉ごろの SK12 のみであり、この頃を境に、江戸後期まで、調査区周辺では人間活動の痕跡がほとんどなくなってしまうのである。

このような遺跡の変遷に反映されていると考えられる歴史上の出来事は、従来から指摘があるように、藤原北家勧修寺家のいわゆる吉田氏の動向であろう。藤原光房の子・経房（康治 2（1143）－正治 2（1200））が吉田の地に別業を設け、浄蓮華院などを建立し、ここを根拠地とするにおよんで、吉田殿と称せられるようになる。「勧修寺経房処分状」（正治 2 年）によれば、「吉田南亭」、「吉田園領」、「吉田角家地」といった屋敷地がみえ、「勧修寺資経処分状」（建長 2（1250）年）では「吉田領」が「東亭」と「西亭」に整理されて相続されたことが分かる〔中村直1941〕。

しかし、この地での繁栄は長くは続かなかったようで、氏長者吉田定房（1274－1338）が南朝にしたがい吉野に移った建武 4（1337）年ごろを境に、浄蓮華院や邸宅は衰亡に向かったようである。応仁の乱をへて、伸長著しい吉田社に領地を蚕食され、16世紀前葉には吉田社の領地へと組み込まれてしまうことになる〔浜崎1983〕。

浄蓮華院の比定地にあたる医学部構内から総合人間学構内西半における発掘調査では、14世紀中葉ごろを境に遺構や遺物の出土量が急激に減少することが指摘されている〔浜崎83〕。本調査区周辺も同様の状況を示している、と理解する。また、本調査区から東へ100～150m離れ、中世白川道の北辺にあたる57・90・181地点の調査では、中世の遺構は13世紀代に集中することが判明している〔岡田・吉野1980、五十川1983、五十川ほか1992〕。本部構内でも、中世白川道の北側の地は、12世紀後葉から14世紀前葉にかけて、とくに13世紀代に生活痕跡がもっともよく残されたといえる。これは、文献にみえる勧修寺家吉田殿の盛衰とはほぼ一致する状況といえる。

以上の状況から、この地周辺が吉田殿の邸宅の一角であった可能性が高いと理解する。ただし、「処分状」にみえる、吉田領内のどの場所に、調査区周辺が比定できるのかは材料が乏しい。今後の検討課題としておく。

**回転台土師器** 中世京都の一般的な土師器である「てづくね成形」の土師器皿類とは

異なり、底部に回転糸切り痕跡をもつ回転台を用いて製作されたと想定できる土師器皿類がSE4を中心にみつかったので、簡単に触れておく（以下、回転台土師器と呼ぶ）。同様の特徴をもつ土師器は、北に隣接する218地点のSE1、230・241地点のSD4などでもまとまって出土しているので、これらも含めて検討してみよう（図64・65）。

本調査区出土の回転台土師器を改めて示しておく、Ⅲ82（SD3）、Ⅲ106（SK13）、Ⅲ167（SK10）、Ⅲ272～Ⅲ281（SE4）となる。従来の成果では、これらは大きく2つに分けられる。「白色土器」と記載されることの多いⅢ82・Ⅲ106・Ⅲ167と、「産地不明」とされるⅢ272～Ⅲ281である。

「白色土器」と記載される一群には、口径8～9cm、高さ2cm前後で、底部から口縁部に向かって直線的に開く形態をとる小皿、口径7.5～9cm、高さ2.5cm前後で内湾気味に立ち上がる小椀、口縁部を内側に折り曲げた耳皿、高台がつく皿がある（図64）。底部以外は回転撫で、丁寧に仕上げられている。これらは灰白色を呈し胎土は精良である。色調・胎土ともに、SE4などから出土していて「白土器」と呼称されることも多い灰白色の土師器椀に似ており、底面に糸切り痕跡を残すという点以外では、「産地不明」とされる一群とは明瞭に区別しうるものである。

「白色土器」は、白色系の胎土を用いた無釉低火度焼成の土師質の焼き物で、山城の緑釉陶器生産と密接なつながりをもちつつ緑釉陶器とは異なる性格をもって展開、その成立は平安前期で、13世紀中葉頃まで生産された、と考えられている〔平尾1994〕。その生産地は、洛北の現在の岩倉かつての栗栖野付近と想定されている〔高橋1997、京都市文観局1993、京都市埋文研1998〕。本調査区出土のこの一群は、「白色土器」の系譜をひき、その

〔白色土器〕

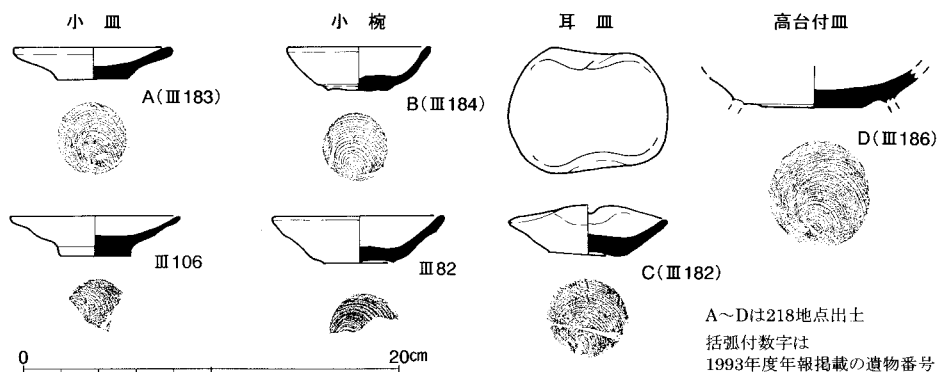


図64 回転台土師器(1)

最終形態に属すると理解することができるだろう。

なお、「白色土器」は本調査区およびその周辺での出土状況をみるかぎり、12世紀後半から13世紀後半の京都産土師器にともなって出土しており、SE4のような14世紀に下るとされる遺構からは出土していない。一方、SE4からは、手づくね成形で灰白色の土師器碗が多量に出土している。こうした灰白色の土師器は、「赤土器」と対になって表現される土師器として、文献上にみえる「白土器」をさすものとされ、「白色土器」から「白土器」への技術的および用途上のつながりが想定されている〔高橋1992〕。出土状況を見るかぎり、「白色土器」の終焉と「白土器」の定型化は表裏一体的な現象と理解できるので、これは上述の想定を支持するものと考えてよいだろう。

つぎに、「産地不明」とされる一群について検討してみよう。この一群の土師器には、口径8～9cmの小皿と口径14cm前後の杯形の皿がある。灰白から黄褐色を呈する。胎土が粗放のゆえか、破断面や器表面に気泡のみられるものが多く、雲母片の目立つものもある。底部を回転糸切りし、さらに板目圧痕を残すものもある。こうした特徴は、小皿と杯に共通し、この二種の生産地が同じであることを想定させる。

SE4から出土しており、218地点のSE1、230・241地点のSD4・SD6・SD7・SX5～SX7からも出土している。共伴した京都産土師器の年代は、230・241地点のSD4とSD7が13世紀前半、218地点SE1と230・241地点のSD6が13世紀中葉、230・241地点SX5～SX7が13世紀後半、本調査区SE4が14世紀前葉である。このように本調査区周辺では、13世紀代から14世紀前葉まで出土している（図65）。

出土量は、SE4出土の土師器碗・皿類81.3個体（口縁部計測法による、以下同じ）のうち5.7個体と7%の割合であり、219地点のSE1は、約840個体という大量の土師器のうちの10個体ほどで全体の1%前後であり、回転台土師器が目立つとされた230・241地点のSD4でも約10%（12.4個体）である。まとまった量が出土しているとはいっても、主体を占める京都産土師器と比較すると、1割以下というのが実態である。

回転台土師器の性格を考える上での、もう一つの特徴は出土状況である。本調査区周辺ではまとまった量が出土しているにもかかわらず、本学構内のほかの調査地点では、出土の報告がほとんどなく、本学構内では本調査区周辺に集中するとみてよい。このように特定の地点あるいは特定の遺構に偏る傾向は、京都市内の遺跡でも認められるとのことである<sup>(1)</sup>。白川街区遺跡では、完形の回転台土師器が一括で土坑から出土している〔吉村96〕。祭祀など特殊な場面で用いられた、という想定を成立させる一方、このようなありよう

# 小 結

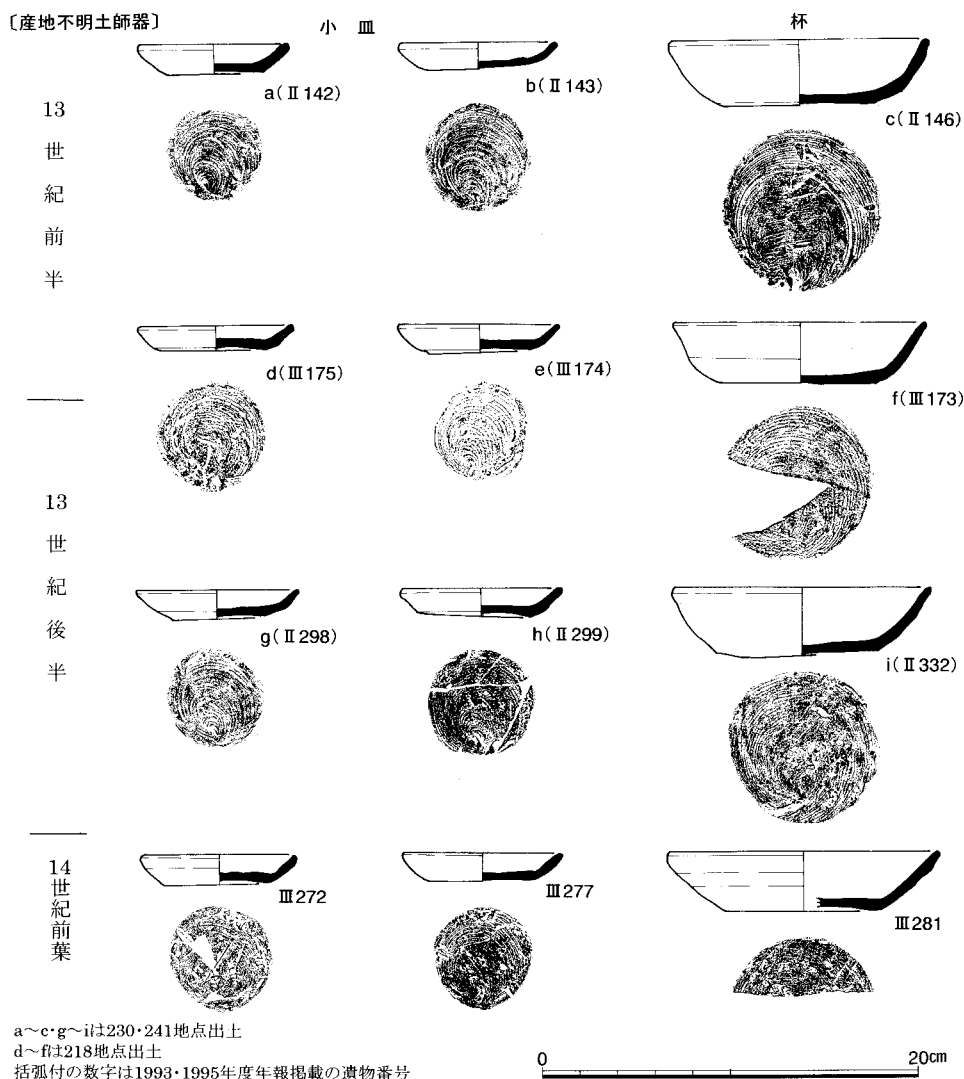


図65 回転台土師器(2)

は、商品としてではない別の由来を反映したものと理解することもできる。

このような土師器の性格を考えるにあたっては、まずこれらの生産地域を特定することが基本的な課題となる。ところが、畿内以外の地域では、回転台を用いた土師器成形がむしろ一般的であり、底部に糸切り痕跡をもつ土師器も広範囲に分布し、器形が単純なこともあって、生産地を特定することは簡単ではない。

先に記したように、この地点が吉田殿の一画を占めるという想定が正しいとすれば、吉

田氏が各地にもつ荘園など特定の地域との結びつきの中でもたらされたものという想定も成り立つだろう。さきに掲げた「勸修寺経房処分状」には、畿内の河内（高瀬庄）、畿内周辺の紀伊（平田庄）・近江（湯次庄）・伊勢（和田庄）・播磨（黒田庄）、西国の伯耆（稲積庄）・周防（石国庄）・筑後（味木庄）、東国の安房（広瀬郷）などに荘園をもっていたことがみえる。これら諸国の荘園のある在地の土師器が「産地不明土師器」の生産地の候補となろう。「産地不明土師器」については、このような仮説のもとに生産地を絞り込み、その性格を追求してゆきたいと考えている<sup>(2)</sup>。

**江戸時代の遺跡** 15～17世紀にいたる空白期をへて、再びこの地に活動の痕跡が認められるようになるのは、18世紀以降のことである。茶褐色土上面で多数検出された耕作関連の小穴は、検出面積が狭く、並びなどを復元できなかったが、218・230・241地点で復元している耕作関連の柵列と同様の性格をもつ遺構と理解できる。江戸時代後半のこの地一帯には、耕作地が広がっていた景観が復元できる。

一方、調査区の南辺で検出した東西溝 SD1 は、東西ともに調査区外へと続いており、50mをこえると思われるが、その長さは不明である。埋土の状況から、明治初年ごろに廃絶し埋め戻されたものと想定する。

この溝は、廃絶時期と規模からみて尾張徳川藩邸に関係すると理解する。本部構内の西半の地には、幕末に尾張藩の下屋敷が設置されたことが絵図にみえ、藩邸の四周を囲っていた堀跡が発掘調査や立合調査で見つかっている〔五十川1981, 京大埋文研1990, p. 2〕。発掘調査の成果と藩邸内の建物配置などを描いた「吉田御屋敷惣図」（名古屋市蓬左文庫蔵）を重ね合わせると、本調査区付近は馬場にあたる可能性が高い。この想定が正しいとすれば、東西溝は馬場の南限を限る区画溝としての機能が考えられる。周辺調査区における尾張藩邸比定地の調査が進めば、その正否も明らかになるだろう。

#### 〔注〕

- (1) 京都市埋蔵文化財研究所、小森俊寛氏のご教示を得た。
- (2) 紀伊国平田庄が比定されている和歌山市域の在地土師器については、和歌山市文化体育振興事業団、北野隆亮氏のご厚意により観察させていただく機会を得、ご教示を得た。京大出土例とは胎土が異なると理解しうが、観察結果の詳細については、ほかの候補地の検討結果もあわせて、別に報告する機会をもちたい。